

歲計豫笑論

全

341
22%



始



齋
編
卷
之
一

愛
節
人
用
而

印

齋
編
卷
之
一
愛
節
人
用
而

a 34
22x

明治二十四年三月

歲計豫集論

細川氏藏版

齋
齋
齋

愛節用而

明治辛卯三月

通法題



歲計豫算論

歲計豫算或ハ單ニ豫算ト稱スル者ハ洋語ノ所謂「ビゼット」ト
 目ヘル者ニシテ字書ニ據レハ革囊ノ義ナリ革囊ハ物ヲ貯
 藏スル者ナルヲ以テ其語ヲ轉用シテ國家財政ニ關スル計算
 書ノ稱トナレル者ナリ英國ヲ始メ其他歐洲大陸ノ諸國皆
 此語ヲ用ヒサル者ナシ只此語ノ由テ出テタル英國ニ於テ
 ハ其意却テ同シカラス英國ノ所謂「ビゼット」ハ會計年度ノ終
 ニ方ツテ出納長官チレンセルノ代議院ニ對シ其年度ノ財政ノ結果及
 次年ノ歲入歲出并ニ租稅ノ増減其他ノ變更等ヲ報道スル
 所ノ演說ニ外ナラス此演說ハ固リ政府ヨリ議院ノ承認ヲ
 求ムル爲ニスル所ノ者ナリ而シテ公ニ之ヲ出版スル者ニ非
 ス只議院ノ演說ヲ報告スル印刷物ニ於テノミ見ル可キ者

ナリ英國ニ於テ此語ヲ用ユルヲ殆ト百三十年以上ニ當
 時出納長官其革囊ヲ開クト曰ヘル通語アリテ今ニ至ル迄
 之ヲ襲用セリ蓋「ピュゼット」ハ文書及計算書ヲ納ル、革囊ノ古
 名ナレハナリ今大陸諸國ニ用ユル「ピュゼット」ハ即其國毎年ノ
 歳入歳出ヲ詳細ニ表示セル一大冊子ヲ指ス者ナリ
 歳計豫算ヲ國會ノ議ニ付スルハ各國憲法ノ規定スル所ニ
 シテ稍異同アリト雖モ其議定ノ時ニ方テ常ニ騷擾アルヲ
 免カレス其成蹟ヲ考フルニ殆ト文明ト稱ス可キ國體ニ似
 サル者ノ如シ余嘗テ謂フ立憲政體ハ政體中ノ至美ナル者
 ナル可シト雖モ然レモ其施行ニ至テハ困難ナルコトハ他ノ
 政體ノ比ニ非ス而シテ歳計豫算ヲ議スルカ如キハ則困難
 ノ尤甚キモノト謂ハサルヲ得ス其故ハ豫算案ハ一國行政
 ノ機關ノ由テ以テ運轉スル所ニシテ之ヲ適當ニ議決セサ

ルモハ機關ノ運轉忽止ニ無政府ノ景況トナル可シ他ノ法
 律案ノ如キハ之ニ反シテ該案ノ一存一廢未タ必シモ全局
 ニ涉ラス苟其全部ヲ擧テ之ヲ全廢スルニ非サレハ無政府
 ノ景況トハナル可カラズ故ニ豫算案ノ關係スル所ハ他ノ
 法律案ノ比ニ非ス而シテ之ヲ議會ノ議ニ付シ議會ノ之ヲ
 議スルニ方テヤ政府ハ常ニ其多カラシク望ミ人民ハ常
 ニ其少カラシク望ム其情勢ノ同カラサルヲ以テ其議論
 ノ際互ニ相軋轢スルハ抑亦免カル可カラザル者ナリ豫算
 案ハ之ヲ稱シテ政府及人民紛争ノ燒點ト謂フモ決シテ不
 可ナルコトナカル可シト信ス「フリッケル」氏ノ豫算論ニ曰ク豫
 算ノ審議ハ兩黨ノ戦争ニ非サルハナシ政府ハ國家ノ代理
 トシテ其權利ヲ張り議會ハ人民ノ代理トシテ其權利ヲ擴
 メント欲シ權利ノ爲一以競争起ルヲ通例トス其豫算ノ議

定ニ至リテハ一方ノ勝利アリテ其爭議ヲ解クニ非ス唯戰
 争ノ繼續ヲナシ得サルニ由リ又ハ之ヲ好マサル一時ノ休
 戰ヲ約スルニ外ナラス故ニ翌年新豫算ヲ議スルモハ其戰
 争再起スト信ナル哉此ノ如キ至難ノ業タルニモ拘ハラヌ
 各國ノ憲法ニ明文ヲ掲ケテ之ヲ議會ノ議ニ付スル所以
 者ハ固リ已ムコトヲ得サルノ理由アリテ其理由ハ各國ノ歷
 史上ノ來歴ニ本ツケル者ナリ爰ニ著名ナル數國ノ例ヲ舉
 ケテ其利害得失ヲ講究セントス英國ノ如キハ立憲國ノ模
 範タルヲ以テ先英國ヨリ始ム以下ルードルフグナイスト
 氏ノ書ニ據テ其要ヲ撮シ又其他ノ書ニ據テ其不足ヲ補フ
 者ナリ
 英國中古ノ世ニ至リ國用増加シ古來ノ政費ニ充テタル王
 室世傳ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得ス之カ爲ニ臨時

ノ歲入ヲ必要トシ民財ヲ以テ補足スルコトナリ其初ハ定
 期徵收ノ者ナレモ其後因襲ノ久キ全ク恒例ノ者トナリ彼
 十八世紀ニ於テハ竟ニ法律上永遠ニ徵收ス可キ租稅ニ變
 シ王室世傳ノ歲入ニ代ル者トナリ十九世紀ニ至テハ加フ
 ルニ一時ノ歲入ヲ以テシ新稅及舊稅ノ増率ニ由リ徵收ス
 ルコトナリ是ニ於テ固定歲入及移動歲入ノ區別ヲ生ス
 固定歲入トハ法律ヲ以テ確定シタル者ニシテ議會ノ承認
 ヲ要セス其歲入ハ古來王室世傳歲入ノ遺物ト經久ノ租稅
 ヲヨリ成立スル者ナリ
 移動歲入トハ即每年議會ノ承認ヲ要スル者ニシテ其歲入
 ハ所得稅及關稅ナリ此所得稅ハ當時法ヲ設タルノ際一時
 ノ新稅トシテ之ヲ徵收シタルニ由テ今尙其意ヲ廢セスシ
 テ新稅ノ如ク視做シタリ關稅ハ每年改定スルコトヲ得可キ

者ニシテ茶ノ輸入税ノ如キ者ナリ此等移動歳入ノ總額ハ
 現今歳入總額ノ大約七分一ナリトス
 豫算表調製ノ「ハ中古其例ナク憲法ニモ其事ヲ載セス」ツ
 「ドル」ノ世ニ至リ始メテ毎年豫算ヲ定ムルノ端緒ヲ開キ
 タレト僅ニ出納官ノ内規タルニ過キス其後「カール」二世財
 政ヲ紊亂セルニ由リ改革ヲ行ヒタリ此改革ニ由リ従前議
 會ノ承認シタル補助ノ政費ヲ國王ノ使用ニ全任シタル者
 ノ制限ヲ設ケタリ其規約ニ曰ク凡ソ新ニ承認シタル金額
 ハ議會ノ決定シタル目的ノ外ニ使用ス可カラスト此ヲ稱
 シテ下院適用規約ト曰フ爾來院議ヲ經テ屢之ヲ應用シ女
 王「アンナ」ノ世ヨリ一定ノ慣例トナレリ又政費ノ増加スル
 ニ從ヒ毎年議會ヲ開ク「ノ慣例トナリシ以來政府ハ翌年
 政費豫算ノ証明書ヲ提出シタルト猶不規則タルヲ免カレ

ス「ウキルヤム」三世以來始メテ定例トナリ女王「アンナ」以來ハ
 二ケ年ヲ除キ毎年必ス歳出豫算案ヲ提出スル「トナレリ
 十八世紀ニ於テ歳計豫算案ノ議事法今日現行ノ體裁ヲナ
 スニ至レリ新會計年度ノ初ニ當リ出納長官ハ下院ニ臨ミ
 財政ノ狀況ヲ詳ニ演說シ歳出豫算ノ協議ヲナシ次ニ歳入
 豫算ニ及フ下院ニ於テハ歳出委員會ニテ政費豫算ヲ議シ
 次ニ歳入委員會ニテ政費支辨ノ方法ヲ議ス審議ノ成績ハ
 之ヲ報告書ニ編纂シ之ニ法律ノ體裁ヲ與ヘ固定資金決議
 書トシテ公布ス
 議會ノ承認ニ關シテ法學上ノ意義ヲ確定スルハ容易ノ業
 ニ非ス英國法制ノ書ニテハ「ハットセル」氏ノ書ヲ以テ大著述
 トスレト徒ニ歴史上ノ慣習ト決議トヲ編纂セルニ過キス
 「グナイスト」氏ハ其著ハセル英國行政法ニ於テ左ノ原則ヲ

示セリ

第一、大臣カ國庫ノ出納ヲ掌ルノ權ハ國王ノ委任ニ由ル者ニシテ議會ノ權利若クハ其委任ニ本ク者ニ非ス

第二、王室世傳ノ歳入ハ國王ノ世傳收入權ト議會ノ養成ヲ以テシ法律上確定ノ租稅ハ法律ノ力ヲ以テシ一年限リノ歳入ハ議會ノ承認ヲ以テス

第三、歳出ハ法律或ハ勅令ニ由テ之ヲ施行ス

十八十九ノ二世紀ニ於テ財政ニ關スル議會ノ慣例ニ據レハ英國ノ豫算法ハ左ノ五原則ニ歸ス可シ

第一、議會ハ豫算決議書ト財政ノ法規トヲ本來ノ法律ノ次ニ置ク可キ者ト看認タリ

第二、豫算超過ニ關シテ大臣ヲ告訴スルノ權ハ憲法ノ條則トスレモ實際殆ト絶テ履行シタルコトナシ

第三、議會ハ歳出科目ヲ議スルニ當リ綱領ニ止リ細小節目ニ涉ラス若細小節目ニ涉レハ大臣責任ノ無効ニ歸スルコトヲ認知スレハナリ

第四、決算報告ハ事後ノ承認ヲ求ムル者トシテ別段ノ影響ヲ大臣責任ニ及ホスコトナシ

第五、豫算案全廢ハ立憲政體ノ本義ニ戻ル者トシ法律上無効ノ者ト認定ス

此五原則ヲ詳ニスルコト左ノ如シ

第一、議會豫算決議書ヲ法律ノ次ニ置ク可キ者ト看認メタルコトハ皆ニ形式上本來ノ法律ト異ナルノミナラス其効力ニ於テモ亦法律ト區別ス蓋財政法ハ可決金額ノ使用ニ關スル條件若クハ權限ノ外他ノ規定ヲ包含ス可カラズ所謂「タッキングスピル」豫算ヲ以テ他ノ法律規則ヲ變改ノ憲法

ニ背戻スルコトハ既ニ近代「ホルチット」氏ノ痛論セシ所ナリ其
 說ニ曰ク「タッキンダス、ビル」ニ由テ豫算議定權ヲ濫用スレハ
 竟ニ憲法ノ全部ヲ變改シテ之ヲ共和政治ニ化スルニ至ル
 可シ何トナレハ其濫用ハ上院及王室ノ立法上ノ拒絕權ヲ
 滅スル者ナレハナリ
 法律ヲ先ニシ豫算ヲ後ニスルノ原則ハ世人未タ之ヲ明ニ
 解釋セスト雖モ英國ニ於テ國王及上下二院ノ協同一致ヲ
 得テ始メテ國意ヲ代表スル法律ハ下院一個ノ決議ヲ以テ
 之ヲ變改ス可カラストノ主義ハ一般ノ遵奉スル所トナリ
 政務ノ永久典範ヲ確定スル法律ハ財政ノ都合ニ由リ毎年
 變換スル決議ヲ以テ或ハ之ヲ廢止シ或ハ之ヲ變更スルヲ
 得サル者トス然レモ此事ニ關シ學者ノ意見モ同シカラス
 下院モ亦「タッキンダス、ビル」ノ禁ヲ判然タル決議ニ由テ認定

スルヲ必要トセス只上院及王室ノ反對アル場合ニ於テ必
 ス此禁ヲ適用ヒリ英國人ハ憲法及法律ヲ遵奉スルヲ以テ
 下院ノ豫算議定權ヲ以テ國王ノ特權上院ノ權利現行ニ政
 法及法律上施設ヲ壞亂スルヲ屑トセサル可シ故ニ下院ハ
 縱モ憲法ニ明文ナク又法律ヲ宣布ナキモ其憲法上ノ權限
 ヲ始終固守シテ之ヲ踰越スルコトナシ
 又英國ノ如キハ先例ヲ以テ政體ヲ組織シタルニ由リ法律
 ト効力ヲ同フスル許多ノ原則實際ニ行ハレテ恰モ習慣法
 ノ如ク遵奉セラルルハ固リ怪ムニ足ラス今其豫算ニ關シ
 テ遵行スル所ノ原則ハ左ノ如シ曰ク法律ハ無上ノ威力ヲ
 有シ議會ノ豫算決議ノ上ニ位シ又勅令ノ上ニ在ル者トス
 故ニ議會ハ豫算ノ承認若クハ不承認ヲ以テ憲法上制定ノ
 法律及之ニ基ケル政務ヲ或ハ廢止シ或ハ變更シ或ハ無効

タラシムルコ能ハサル者トス
第二、豫算超過ニ關シテ大臣ヲ告訴スル以テ權ハ確乎不拔ノ
原則ナレドモ下院ハ此權ヲ以テ大臣以テ行爲ヲ牽制スルニ止
リ實際訴訟ヲ起シタルコトハ既往二百年ノ間只一回ニ過キ
ス此場合ニ於テモ亦之ヲ試ミントシテ果サズキ其所以
ハ縱使之ヲ斷行スルモ毫末ノ利益ヲ見サルコトナラス議
會以此ノ如キ告訴ヲ實施ス可カラサルコトヲ明知スレハ
凡ソ大臣ノ豫算超過ニ關スルソ責任ハ法律ニ準據シタ
ル場合ト專斷又場合ト法律ニ違背シタル場合トノ區別ア
リ法律ニ準據シタル場合ニ於テ金額ヲ支出スルコトハ縱使
豫算ニ其額ヲ載セサルモ猶其職權ニ在ル者トス只此ヲ如
キ豫算外ノ支出ヲ大ニシタル時大臣ハ其處置ヲ法律ニ戻ラ
サルト事實穩當ナルトヲ證明スルノ義務アルコトニ專斷シ

場合ハ即下院否決シタル支出ニ至テハ其證明甚困難ニシ
テ大臣ノ地位甚危險ナリ然レモ大臣ノ專斷ヲ以テ支出シ
タルノ實例ハ十八世紀以來嘗テ之ヲ見ス故ニ大臣ヲ告訴
シタル實例アルコトナシ若下院ノ否決シタル金額ヲ支出ス
ルニ至ラズトス之ト同時ニ現行ノ政法ニ背反スル支出ヲ
亦大臣ハ其責ヲ免カレ可ラカス然レモ英國曾於テ數
百年來絶テ之ヲ行フナシトハ數々モ或レモ實例ナシ
第三、歳出科目ノ綱領ヲ議スルニ止リ其細小節目ニ涉リ
ルハ英國ノ議院カ近時ニ至ルマテ固守セシ所ノ原則ニシ
テ大陸諸國ノ解釋トハ大ニ其趣ヲ異ニス古來多少ノ變遷
アリト雖モ十八世紀ニハ僅カニ大科目ヲ議スルニ止リ近
時ニ至リ豫算科目ヲ更ニ細分シタルモ猶二百款ヨリ多カ
ラス蓋豫算ノ審議行政ノ細事ニ進入スルハ議會カ行政

上ノ責任ヲ己ニ負フコト益多ク其極竟ニ政府ニ遺スニ執行
ノ勞ヲ以テスルニ至リ政務弛緩シテ何人モ此責任ヲ負フ
者ナキニ至ル可ケレハナリ輒近五十年來行政ノ細小問題
ヲ斷セシトスル者ナキニ非スト雖モ英國ノ政黨ハ實地
政務ニ練熟スルカ爲能之ヲ節制シ其弊ヲ矯ムルコト力メ
タリ是ニ於テ豫算ヨリ削除スル科目ハ通常二三ノ臨時費
目ニ止リ實務ニ干涉スルコトハ勉メテ之ヲ避ク近時下院ニ
於テ豫算費目ヲ削除シタル統計ハ左ノ如シ千八百五十八
年ニ美術陳列場ノ派遣員ノ俸給ヲ削除シ千八百五十九年
ニ法律編纂委員費二千三百六十磅ヲ削除シ千八百六十年
ニ肖像建立費補助金及商務官ノ寫字生給料八百磅ヲ削除
シ千八百六十一年ニ造船所ノ擴張費三千二百二十四磅ヲ
削除シ千八百六十二年ニ蘇格蘭ノ道路橋梁費五千磅ヲ削

除シ千八百六十三年ニ在リモンスタクニテノ「ブル」建築記者
一名ノ給料四百磅及在「ス」ス「ケン」シ「ト」ト「博覽會場」ノ
購求費十萬五千磅ヲ削除シ千八百六十四年ニ「マルタ」港修
築費五千磅及癡狂院費ヲ削除シ千八百六十五年及千八百
六十六年ニハ「一科目」ノ削除ヲモナシ、リ「マイ」氏ノ英國
憲法史ニ曰ク國王ヨリ議院ニ請求スル政費ハ下院必ス之
ヲ可決セリ一人ノ兵卒一人ノ水夫一艘ノ船モ減削セルコ
トナシ毎年ノ豫算ハ一二ノ細目ヲ除キ別段ノ削除減額ナク
シテ議院ヲ經過セリト是ナリ
第四、決算ヲ證明スルコトハ事後ノ承認ヲ求ムル者ニシテ猶
豫算審議ノ事前ノ承認タルカ如シ其目的ハ豫算超過ノ處
置ヲ認定スルニ在リ近時下院ノ決議シタル規定ハ第一隨
意專斷ノ豫算超過ヲ未前ニ防キ第二已ニ實行シタル豫算

超過ノ當否ヲ確定スルハ是ナリ此新規定モ亦偏ニ大臣
 般ノ責任ヲ重シ豫算超過ニ關シテ別段ノ訴訟ヲ起ス
 至ラス
 第五、豫算全廢ハ英國ニ於テ未タ其例ヲ見ス中古時代貴族
 會ニ租稅拒絕權ト稱スル者アリテ今日猶其一部分ヲ存ス
 ル者アリ即議會カ一定ノ期限ヲ定メテ承認シタル租稅ヲ
 一年限リ拒絕スルヲ及各種ノ國債及其貸借ヲ否決スル
 是ナリ豫算全廢ハ此拒絕ト全ク其性質ヲ異ニス議會カ豫
 算案ヲ議スルハ政費支辨ノ事ニ參與スル者ナリ而シテ今
 豫算案ヲ全廢スルハ則其參與權ヲ自棄スル者ノ如シ法律
 上ヨリ之ヲ言ヘハ憲法ニ違背セル無効ノ事タラサルコトヲ
 得ス是慎密鄭重ヲ以テ名ヲ得タル英國議會ニ於テ未タ豫
 算全廢ノ舉アラサル所以ナリ英國憲法史中豫算全廢ノ一

例トモ稱ス可キ者ハ前後只一回ナリト雖正全ク特異ノ事
 情ニ由ル者ニシテ通常ノ場合ト同視スルヲ得スマイ氏ノ
 憲法史ニ曰ク千七百八十四年下院ニ於テ豫算金額ノ承認
 ヲナシ肯セサリシコト古今無二ノ特例ナリ當時國王ニ憲
 法違反ノ舉アリテ議會ヲ激シテ不承認ニ至サシメタリト
 雖正政務ニ忽障礙ヲ生シタルヲ以テ其不承認ハ全ク無効
 トナレリ爾來下院ハ内閣ヲ困ムルニ此ノ如キ手段ヲ用ヒ
 ス顧フニ下院ハ此ノ如キ危險ノ議決ヲナセハ之カ爲ニ重
 大ノ責任ヲ負フ可キヲ自認シ而シテ國家ノ財政及信用ハ
 下院ノ決議何如ニ在ルヲ以テ前後ノ思慮ナク承認ヲ拒ミ
 テ財政ノ梗塞ヲ誘起スルハ下院ノ宜ク戒ム可キ者トセリ
 此ニ由テ之ヲ觀レハ世ノ論者カ英國ノ憲法ヲ引證シ下院
 ノ權利ノ基礎ナリト信認スル歲出承認權ト曰ヘルニ派獨

立ノ者ハ英國ニ於テハ未タ嘗テ存在セズ要スルニ議會ノ
 歳出承認ハ資財ヲ給ス可キ義務ヲ包藏シ且大臣ニ對シテ
 起リ易キ告訴ヲ豫防スルハ外別ニ意義アル者ニ非ス議會
 ノ勢力ハ歳出ノ認不認ニ非スシテ專ラ歳入ノ承認ニ在リ
 而シテ英國ノ現制ニ據ルニ毎年國庫收入額ノ大約七分一
 及各種ノ募債ハ議會自由ニ之ヲ可否スルモ其他ハ然ラズ
 故ニ議會ノ隨意ニ可否シ得ル所ハ時トシテ移動歳入以テ
 部分ニ止ルコトヲ豫算ノ決議ヲ以テ國王ノ永久收入若
 クハ法律上現在スル租稅ヲ毎年可否ス可キ租稅ニ變改セ
 ント試ミタルコトハ一回モ之ヲシトス

以上ハ英國ノ豫算法ナリ佛蘭西白義耳ノ豫算法ハ全ク之
 ト相反セリ獨此二國ノミナラス凡ソ大革命ニ由テ新舊制
 度ノ連絡ヲ絶チタル國ニ在テハ皆然ラサルハナシ此等諸
 國政治社會ノ理想ニ從ヘハ政權ノ本源ハ君主ノ統治ニ非
 スシテ主權ハ人民ニ在ル者トシ此主權ヲ以テ一切政權ノ
 本源トス千七百八十九年革命ノ際ノ公示ニ曰ク主權ハ必
 ス國民ニ存ス如何ナル人如何ナル團體ト雖モ明ニ此主權
 ヲ出ツル所ノ權力ノ外ハ之ヲ行フコトヲ得スト而シテ千
 七百九十一年九月十四日ノ憲法第三欸第一條乃至第五條
 ヲ以テ此主義ヲ規定セリ其文左ノ如シ

第一條、主權ハ唯一ナリ分割ス可カラズ讓與ス可カラズ
 又時効ニ由リテ喪失ス可カラサル者ニシテ必ス
 國民ニ屬ス

第二條、諸權ハ其原悉ク國民ニ出ツ國民ハ之ヲ委任スル
 ノ方法ニ依ルニ非スシハ之ヲ施行スルコトヲ得ス
 吾佛國ノ憲法ハ代議的ニシテ其代表者ハ立法的
 ノ團體及國王ナリトス
 第三條、立法權ハ人民任意ノ撰擧ニ係ル在職有期ノ代議
 士ヲ以テ組織スル國民議會ニ之ヲ委任シ該議會
 ハ國王ノ認可ヲ經テ之ヲ施行ス
 第四條、政體ハ君主政治ナリ行政ハ之ヲ國王ニ委任シ國
 王ノ命令ヲ受ケ責任アル大臣若クハ其他ノ官吏
 之ヲ施行ス
 第五條、司法權ハ適宜ニ人民ノ撰擧ニ係ル判事ニ之ヲ委
 任ス
 此理想ハ立法權ヲ他ノ諸政權ノ首位ニ置キ而シテ一切政

府ノ權利ヲ擧ケテ法律執行ノ一權ニ限局セシメ且法律實
 施令ノ外他ノ命令アルヲ看認メス是ニ於テ統治權ハ變シ
 テ徒ニ行法權トシテ存スルノミナリ又白耳義ノ憲法ハ簡
 明ニ此理想ヲ顯ハシタリ其言ニ曰ク凡ソ政權ハ國民ヨリ
 出ル者トス又曰ク立法權ハ國王代議院及元老院ノ三者協
 同シテ之ヲ施行ス又曰ク憲法ニ定メタル行法權ハ國王ニ
 屬ス故ニ國王ハ法律實施ヲ爲規則命令ヲ發布スルコトヲ得
 ト此明文ニ由テ之ヲ見レハ縱ヒ立法權ハ國王代議院及元
 老院ノ三者ニ配分スト雖モ其權ノ腦髓ハ人民代議體ニ在
 ルヤ復疑ヲ容レヌ故ニ國王ハ法律即民意ヲ以テ已ニ附與
 シタル權利ノ外別ニ一權ヲ有セス
 佛白二國ニ於テ前陳ノ原則ト歴史上ノ君主權ト混合シタ
 ルカ爲十八世紀ノ中頃ヨリ以來實ニ名狀ス可カラサル紛

亂ヲ惹シタリ「スター」氏ハ此理想ヲ革命主義トシテ駁撃
シタレト寧歴史上政治法律ノ連續ヲ破壊セルノ結果ナリ
ト曰フテ可トス蓋其國家ハ此場合ニ在テ主權在民主義ヲ
公認シ僅ニ自定ノ制限ニ依リ其跋扈ノ勢ヲ抑フルノ外別
ニ良策ナカリシナル可シ
此ノ如キ理想ハ亦之ヲ官有財産ノ解釋ニ及シ其眼中ニハ
王室財産王室世傳ノ收入及官有財産アルコトナク國ノ資財
ハ渾テ人民ヨリ出タル者トシテ民意ハ其立法權ニ依テ此
資財ヲ主掌ス佛國ニ於テハ「ブルボシ」朝ノ再興以來白國ニ
於テハ國王「レオポルト」一世ノ踐祚以來實施セラレタリ
佛國大革命ノ際制定シタル憲法第三百二條ニ曰ク國政上
ノ行務ハ毎年立法府ニ於テ審議確定ス可シ國政上ノ行務
ヲ確定スルノ權ハ獨立立法府ニ屬スト又共和第五年十一月

二十二日ハ法律ハ每年收入支出ニ覽表ヲ製シテ之ヲ立法
府ニ提出ス可シト定メタリ此百カ以來豫算法ノ意義一定
シテ爾後憲法ノ改定アルモ豫算法ノ意義ニ於テ變更スル
コトナシ千八百六十二年五月三十一日更ニ有効ノ解釋ヲ下
シテ曰ク豫算表ハ毎年國庫ノ收入支出ヲ命スル所ノ決議
書ナリト是ニ於テ毎年ノ收入支出ハ立法議會ニ其全權ヲ
委任スル者トナレリ
然レト佛帝「ナポレオン」一世ハ右ノ原則ニ妨ケラル、コトナ
ク政費ヲ自由ニ主宰センカ爲必要ノ特權ヲ把持スルコトヲ
得タリ然レト「ナポレオン」一世ノ位ヲ廢スルニ當リ元老院
ハ之ヲ彈劾スルニ租稅徵收ニ關シ又手數料雜稅ノ設定ニ
關シ法律ニ依ラスシテ擅ニ之ヲ行ヒ以テ憲法規約ヲ蹂躪
シタルコトヲ以テセリ復古王室ハ諸般ノ制度ヲ再興シタル

ニ拘ラス王室財産ヲ挽回スルヲ得スシテ千八百十四年九月廿三日ノ法律ニ由テ豫算ハ政府一切歳入歳出ヲ包含スル者トナリ内閣ハ豫算本書ノ外ニ特別豫算書ヲ提出シテ必要ノ餘地ヲ存スルヲ得タリ王朝ノ時ニ至リ豫算議定權ヲ絶對無限トスルノ主義一層確實トナリ就中千八百三十一年十月十六日ノ法律ハ豫算議定權ヲ無限ノ原則トスルニ由リ豫算科目ハ更ニ其數ヲ増シ其決算報告ノ如キモ更ニ細密ヲ加ヘタリ但各省ハ臨時及補缺ノ負債ヲ起スヲ得ルノ一點ニ於テ稍自由ヲ得タリナポレオン三世ハ多年元老院決議ノ効力ニ由リ財政ノ自由ヲ占有シ豫算科目ノ流用ハ勅令ヲ以テ隨意ニ許否スルヲ得タリシカ興論ノ攻撃ニ由リ元老院ハ千八百六十一年十二月三十一日ノ決議ヲ以テ豫算科目流用ノ制限ヲ恢復シ豫算表中六十

六科目ハ全ク流用ス可カラスト定メタリ但其中一科目ニテ六億二千二百萬法及二億七千百萬法ニ上ル者アリタリ議會ハ多年豫算科目ヲ一層細別シテ之ヲ議セシメテ力ヲ得タリシカ共和政府ノ興ルニ及ヒ始メテ之ヲ實施スルコトヲ白耳義憲法ハ豫算議定權ノ無限ナル原則ヲ明示セリ

第百十條、凡ソ國稅ハ法律ヲ以テスルニ非レハ賦課ス可

第百十一條、國稅課徵ノ法律ハ其効用一年ヲ限リシテ毎年

第百十五條、議院ハ毎年歳出入ノ決算ヲ認定シ豫算ヲ議

第百十六條、國ノ支出收入ハ總テ豫算表及決算表ニ掲載ス

第百十六條、會計検査院ノ僚員ハ代議院之ヲ選任ス
 凡ソ此等ノ關係ニ於テ其根本トスル所ノ理想ハ皆同一軌
 ニ出テサルハナシ其理想トハ他ナシ社會即人民ハ一切ノ
 政權ノ本原ナリ政府ノ財産ハ皆人民ノ財産ナリ政費ハ皆
 民資ヨリ支給スル者ナリト信スルコト即是ナリ此理想ニ本
 キ其立法議會ニ於テ毎年議決スル豫算ハ人民ヨリ國ノ歳
 出入ニ係ル事件ヲ行政官ニ委任スル者ナリト確信スルハ
 少モ怪ムニ足ラス
 大陸諸國ニ於テ英國ノ政治ヲ模範トスルニ當リ其煩ヲ避
 ケテ要領ノミヲ取り複雑ノ者ヲ簡明ニナシタルノ功固リ
 少カラスト雖モ英國制度ノ彼此相連繫スル所ノ關節ハ委
 ク之ヲ拋棄シ只民權ノ擴張ニ便ナル外貌アル原則ノミヲ
 採用シタルトハ掩フ可カラサルノ事實ナリトス是ニ於テ

大陸諸國ニ傳播セル英國政治ノ想像ハ表面英國ニ似タル
 所アレモ國法上其基礎ヲ異ニセルヲ以テ不具不完全ノ者
 トナレリ此ノ如ク英國ノ一半ヲ取り一半ヲ削リ其外觀ヲ
 模擬セル一種ノ政體ハ大陸諸國ノ所謂立憲政體トナリ縱
 ヒ有識ノ人タリモ不完全ナル想像ヲ以テ立憲上ノ原則ナ
 リト信認スルニ至レリ
 千八百二十二年佛國議院ニ於テ「ロ―エル、コルヲルト」氏有
 名ナル豫算論ニ言ヘルコトアリ曰ク政府ノ歳出各科目ハ議
 院ヨリ行政官ニ附與シタル特別ノ委任ニ基因シ且行政府
 ヲシテ議院及國民ニ對シテ負フ可キ義務ヲ生セシムル者
 ナリ即各科目ハ一ノ委任ニシテ委任ハ一ノ契約ナリ此契
 約ハ即特別ノ義務ヲ生スル者ナリト然ルニ當時ノ議員ノ
 多數ハ此說ヲ實施スルコトヲ拒ミタリ蓋此說ヲ履行スル

ハ一切ノ行政權ヲ直接ニ議院ノ手ニ移スコトナリ其影響
ノ及フ所立憲民主國ト雖モ猶之ヲ統治スルコト能ハサルノ
域ニ達スルコトノ恐アレハナリ
此ノ如キ誤謬立憲論ノ旨趣ヲ行政區域ニ推及スルハ忽
立憲政體ノ本性ニ抵觸シ解カント欲シテ解ク可カラサル
ノ一大矛盾ヲ生ス可シ
第一、隨意ノ豫算決議權ナレハ各人ノ權利及利益ハ常ニ
危險ノ域ニ在リテ片時モ安固ナルコトヲ得ス何トナ
レハ許多ノ租稅、就中地租、營業稅、消費物稅及關稅ハ
増減伸縮極リナク忽ニシテ廢シ忽ニシテ興リ人民
ノ經濟ヲ斷エス震動スレハナリ
第二、行政ノ經久牢固ナルコトハ盛衰浮沈極リナキ政黨ニ
對シテ法律上ノ節制トナル者ナルニ此ノ如キ無限

ハ一切ノ行政權ヲ直接ニ議院ノ手ニ移スコトナリ其影響
ノ及フ所立憲民主國ト雖モ猶之ヲ統治スルコト能ハサルノ
域ニ達スルコトノ恐アレハナリ
此ノ如キ誤謬立憲論ノ旨趣ヲ行政區域ニ推及スルハ忽
立憲政體ノ本性ニ抵觸シ解カント欲シテ解ク可カラサル
ノ一大矛盾ヲ生ス可シ
第一、隨意ノ豫算決議權ナレハ各人ノ權利及利益ハ常ニ
危險ノ域ニ在リテ片時モ安固ナルコトヲ得ス何トナ
レハ許多ノ租稅、就中地租、營業稅、消費物稅及關稅ハ
増減伸縮極リナク忽ニシテ廢シ忽ニシテ興リ人民
ノ經濟ヲ斷エス震動スレハナリ
第二、行政ノ經久牢固ナルコトハ盛衰浮沈極リナキ政黨ニ
對シテ法律上ノ節制トナル者ナルニ此ノ如キ無限
第三、上院ハ國家ノ秩序法典ヲ維持スル機關トシテ存立
スル者ナルニ自ラ有名無實ノ者トナル可シ何トナ
レハ下院ノ多數說ニ由テ現行法實施ノ費額ヲ拒ミ
該法ヲ無効トシメ又新法ヲ設ケント欲スルモ費
額ヲ承認ナケレハ到底之ヲ實施スルコトヲ得サレハ
第四、一國ノ憲法ハ各個ノ法律ト共ニ豫算決議ニ由テ其
効力ヲ失フコトアル可シ是ニ於テ法律ニ由テ運動ス
ル可キ政府ハ變シテ租稅承認會日々決議ニ由テ進
退ス可キ政府トナル

然レモ佛國ハ「ベンサム」氏ノ實利主義ヲ篤信シ其豫算ニ於ケルト常ニ實利ノ原則ヲ固守シ力ヲ其弊ヲ避ケタリ國家ノ基礎未タ大ニ變動セサル間ハ各種族猶能ク相容レ幸ニシテ實際大矛盾ヲ見ルニ至ラザルキ之ヲ要スルニ佛白二國ハ立憲民主國ナレモ猶英國獨逸國ノ立憲君主國ノ如ク左ノ五件ニ於テハ略同一ナリトス

第一、豫算決議ニ由テ法律ヲ變更スルコトハ明ニ之ヲ禁セサルヲ以テ豫算法ヲ以テ眞ノ法律ヲ變改廢止スルモ妨ナキ者ノ如シト雖モ夫ノ行政司法ヲ整理スル眞ノ法律ノ如キモ亦上院及國王ノ承認ヲ經タル國民ノ意思ニ本クコトハ豫算法ト異ナル所ナシ豫算法ヲ眞ノ法律ト視做ス以上ハ他ノ法律ト輕重ノ別アル可カラズ是ニ於テ一ノ撞着ヲ生ス即經久ノ法律ト毎年變換スル法律トノ中孰レヲ以テ一國

人民ノ遵奉ス可キ法典ト定ムルヤノ疑問是ナリ此撞着一日モ存ス可カラサルヲ以テ代議院ハ已ムコトヲ得スシテ左ノ原則ヲ認定シタリ曰ク凡ソ代議院ハ立法議會ニ於テ經久ノ典範ナリト議決シタル者ハ豫算審議會ニ於テ一年限ノ典範ナリト議決シタル者ノ上ニ位セサル可カラスト此ニ由テ該疑問ハ主權在民ノ國ニ於テモ竟ニ左ノ一點ニ歸シテ其局ヲ結セタリ

憲法ニ準據シテ發布シタル司法及行政法ハ毎年變換スル豫算決議ヨリ重キ者トス

佛國ノ新共和政府ニ於テ民主主義ノ極端論ト大ニ激昂セル黨派心ト相投合シテ新政體ノ存廢ヲ爭ヒタルハ議院ハ豫算決議ヲ以テ法律ニ基ケル陸軍僧徒費ヲ全廢シタルハ忽其違法ノ決議タルコトヲ發見シテ之ヲ復スルコトニ決議セ

リ又嘗テ「セイシ」州ノ副知事兩員ノ地位ヲ削除シタルニ當
時ノ議者ハ只一時關位ヲ生シタル者ト視做テ遠カラス舊
ニ復シタリキ
第二、豫算超過ニ因テ大臣ヲ告訴スルノ權ハ公認ヲ得タル
原則ナレトモ代議院ハ之ヲ以テ勝敗ヲ試ミタルコトナク又縱
ヒ告訴權ヲ實施スト雖モ其目的ヲ達ス可カラズ大臣ハ固
リ代議院ノ議定シタル科目ヲ遵守ス可シト雖モ國家ノ性
質及職務ノ性質ヨリシテ大臣ノ豫算科目ノ數字ヲ墨守シ
得可カラサルコトハ立憲民主國ニテモ當然ニ行ハレタリ蓋
豫算表ハ官吏ノ行務ヲ示定スル無二ノ典範ニ非スシテ司
法及行政法ハ第一ノ典範ナリ若陸軍大臣ニシテ豫算金額
不足ノ故ヲ以テ軍馬ノ飼養ヲ廢シ内務大臣ニシテ豫算表
中ニ費目ナキノ故ヲ以テ水害及流行病ノ防禦ヲ怠リ或ハ

定額金ニ餘ナキノ故ヲ以テ獄舎ヲ開放スル等ノ處置ヲナ
サハ委任條件ノ踰越トシテ裁判ヲ下ス可キヤ只現行法ニ
背戻スル專横隨意ノ歲出ニ在テハ大臣ニ對シテ私訴ヲ試
ム可シ然レトモ佛國ニ於テハ其例ナシ其所以ハ大臣責任法
ノ原則ヲ公認スルニ在ルナル可シ
第三、豫算科目ヲ議スルニ一定ノ制限ヲ設クルハ實利主義
ト相連繫シテ離レサル者トス豫算科目ヲ細分シ一々其細
目ヲ議決スルトモ大臣責任ノ効力ヲ弱メ竟ニハ之ヲ消滅
ス可シトノ思想ハ民主國ニ於テ見サル所ナリト雖モ必シ
モ行政ノ全務ヲ議院ノ掌中ニ握ラントスルニ汲々タラス
技術上ノ細事ニ干涉スルヲ欲セサル者ナリ故ニ獨逸ノ豫
算審議ノ方法ト比較スルニ佛國ノ豫算科目ハ頗ル少數
ニシテ各官廳ニ由テ類別セル僅々ノ項目ニ止リ「ナポレオ

三世ノ朝ニハ全一省ノ經費ヲ一欸トシテ之ヲ議シ更ニ其細目ニ議及セザリキ新共和政府ハ千八百七十一年以來豫算表ノ各項ヲ議セシムト雖其項ハ却テ孛國ノ欸ヨリモ多額ナル者ナリ但臨時費補充費ニ於テ詳細ニ其節目ヲ議スルハ固リ當然ノ事ニシテ怪ムニ足ラス然レモ佛人ハ行政事務ニ巧ナル故豫算科目ヲ徒ニ細分シテ行政ノ活動ヲ妨クルヲ肯セス何トナレハ若細小節目ニ拘泥シテ活動セシメサルモ却テ節儉ト便宜ノ處置トヲ失ハシムレハナリ其他特別豫算表即補充豫算表ト稱スル者ヲ設ケテ經常費ノ不足ヲ補ヒ行政ノ各部ニ許多ノ餘地ヲ與ヘタリ第四、決算ノ承認及會計検査ハ佛白二國ノ憲法ニ於テモ事後承認ノ性質ヲ有シ豫算案ノ承認ニ於ケル時ト別ニ異ナル所ナシ豫算定額ノ超過ハ逐一之ヲ次回ノ國會ニ提出シ

テ其承認ヲ求ムト雖其結果ハ常ニ可決ニ非ルハナシ若承認ナキモハ内閣ト議院トノ間ニ嫌惡ス可キ争ヲ生スルヲ以テ大概其議ハ延ヒテ次回ノ會期ニ至ル可シ此時法律ニ違背セル事實明白トナリ又全ク隨意ノ豫算超過ニ屬スルモハ議會ヨリ大臣ヲ告訴シ又ハ訴願ヲナスコトヲ得可シト雖其實際ニ至テハ其例アルヲ見ス蓋此ノ如キ不法ノ豫算超過ハ之アルコトナル可ク且大臣ヲ告訴スルモ其目的ヲ達スルコト難カル可シ又三四年ヲ經過スルノ後ニ至テハ既往ノ會計ヲ審査スルモ殆其利益ナカル可ケレハナリ第五、政府ノ歳入ヲ人民ノ資財ヨリ出ル者トシテ代議院毎年之ヲ承認スト憲法ニ定メタル國ニ在テ豫算案ノ全廢ハ未タ以テ不法トス可カラズ立憲民主主義國ニ在テハ主權在民主義ニ從ヒ豫算全廢ヲ當然ノ條理トシテ内閣ニ對シ威

嚇手段ニ用フルナキニ非ス但幾分ノ禮節ヲ存シテ之ヲ
 行フニ豫算審議延期ノ名ヲ以テセリ然ルニ佛國革命ノ際
 ノ經驗ニ由テ豫算案ノ全廢ヲ以テ内閣ヲ要シテ同意セシ
 ムルノ手段ニ用フ可カラサルヲ信認シタリ其立憲王政
 ノ朝ニ年々此手段ヲ用ヒシハ恰國王及上院ノ憲法上ノ權
 利ヲ減却スル者ノ如シ之カ爲全政府ハ變シテ下院ヨリ每
 年委任ヲ受ル所ノ受托者トナル可シ
 是ヲ以テ之ヲ見ルハ豫算權ヨリ生スル一切ノ結果ハ其
 根本ノ解釋ニ付キ一大反對アルニ拘ハラズ英佛二國ノ實
 際ニ於テハ大概一致スル者ト謂フ可シ然レモ二國ノ憲法
 ニ於テハ決シテ其主義ヲ同フセス佛國ハ社會ノ激烈ナル
 騷擾中ニ於テ主權在民主義ヲ基礎トシテ生出シ英國ニ於
 テハ然ラサルヲ以テナリ

以上論スル所ハ佛白二國ノ豫算法ナリ獨逸ノ豫算法ニ至
 テハ「グナイスト」氏及「ラバント」氏之ヲ論スルヲ頗詳ナリ今
 余ハ我帝國豫算ヲ議スル爲ニ外國ノ事ヲ以テ參考ニ供ス
 ルニ過キサルヲ以テ獨逸ノ制ニ至テモ亦「グナイスト」氏ノ
 說ニ本キ其要ヲ撮スルヲ左ノ如シ獨逸ノ豫算法ハ千八百
 十五年乃至千八百四十八年ノ間ニ百般ノ議論ヲ經テ漸ク
 發達シタリ當時有識者ノ多數ハ現在ノ國家ニ反對シ社會
 公衆ヲシテ佛國ノ政治思想ニ傾カシメタリ人民ノ國政ニ
 參與スルノ權利ハ佛白二國ノ制度ニ於テ簡易ニ之ヲ實行
 シタルヲ以テ世人ハ二國ノ制ヲ尤實地ニ適シタル者ト思
 惟シ英國ノ模範ヲ引テ證據トスレモ佛國ノ制果シテ英國
 ノ原型ト一致シタルヤ否ニ至テハ絶テ之ヲ研究セス粗漏
 モ亦甚シト謂フ可シ是ニ於テ彼ノ國ノ歲入ハ民財ヨリ生

シ民選議會ハ一切ノ歳入歳出ヲ年々承認ストノ理想一般ニ行ハレ永遠堅固ノ参政權ヲ有シ必要ノ機ニ臨ミ内閣ヲ更迭セシムルニハ政費ノ承認ヲ以テ最適當ノ權柄トシ且内閣ノ更迭ハ議院政治ノ本性ナリト信認セリ其方針ヲ執リ獨逸各邦ノ財政皆右ノ理想ニ合センコトヲ力メ獨逸舊時ノ貴族制ニ行ハレタル同名異質ノ租稅承認權ヲ腦裏ニ藏シ契約ノ思想世ニ行ハレタル詳ニ之ヲ言ヘハ君主ト豪族トノ間ニ締結シタル契約ヲ基礎トシテ國用ノ一部ヲ君主ノ財産ニ負擔セシメ一部ヲ豪族ニ負擔セシムルノ規模ハ深ク人心ニ固着シタリ故ニ舊制ノ貴族會ニ代ヘテ新主義ノ民選議院ヲ設ケ當時ニ存セシ舊態ヲ憲法ノ條則ニ編入シ新主義ノ豫算法ニ改メ王室世傳ノ歳入ヲ廢セサル代リニ昔時ノ租稅承認權ヲ挽回シ更ニ之ヲ擴張センコトヲ求メ

タリ之ニ由テ瓦敦堡及索遜等ノ憲法ニ其規定ヲ設ケシカ
其他諸國ノ憲法就中千八百四十八年以來ノ憲法ニ至テハ
立法ノ體裁漸ク改マリ君民契約ノ理想ヲ排斥スルニ至レ
リ然レモ租稅承認ノハ阿諾威巴丁及墨西哥ノ諸國ニ行ハ
レタリ巴威里亞ニ於テハ直稅ハ每年之ヲ議セスシテ獨間
稅ノミ年々之ヲ承認ス其他ノ諸小國ニ於テモ大同小異ナ
リトス
此租稅承認權ハ元來一國ノ主權ニシテ一國君主ノ權ニ異ナ
ルコトナシ十七八世紀ニ於テ國家ノ性質ニ本キ一ノ原則ヲ
設ケテ實際ニ之ヲ行ヒタリ其原則ニ曰ク國家ハ他ノ承認
ヲ須タサル確固ノ資金ヲ缺クモハ之ヲ保持スルコトヲ得ス
ト此ニ由テ所謂襲用及必要ノ租稅ヲ設定シ貴族會議ニ於
テ拒ム可カラサル者トナシ獨逸帝國及大審院ハ各邦ノ貴

族會議カ其政府ノ政務執行ニ缺ク可カラサル費用ヲ拒ム
ニ當リ之ヲ強制シテ費用ヲ賦課スルノ職務ヲ行フ而シテ
此制ハ千八百六年獨逸帝國憲法ノ廢止ト共ニ消滅セリ然
レモ實際其缺ヲ補フ可キ必要ヲ感シ新憲法ニ明文ヲ掲ケ
テ曰ク政務ノ施行ニ必要ナル歳出ハ議會之ヲ拒ムコトヲ得
スト加之同盟各國共ニ豫算案ノ審議調ハサルモハ假ニ前
年議定ノ額ニ依テ收支ヲナス可シトノ條則ヲ設ケ其後獨
逸聯邦ノ起ルニ及ヒ其決議書ヲ以テ聯邦ハ各政府ノ政務
ニ缺ク可カラサルノ資金ヲ保證ストノ原則ヲ宣布セリ之
ヲ要スルニ獨逸大小邦國ノ立憲制ハ租稅承認權ノ原則ト
佛國ニ模倣セル豫算法ノ混合ヨリ成立セルト明白ニシテ
其新舊原則ノ互ニ相抵觸スルモ之ヲ判斷スルノ方法ナカ
リシナリ

字國ハ前記ノ諸國ト全ク其趣ヲ異ニス夙ニ王室ノ財政ト
貴族會ノ承認ヲ要スル財政トノ分裂ヲ止メ國家歲計ノ統
一ヲ謀リ專制國ノ時ヨリ毎年ノ歳出入ヲ豫算表ニ掲ケ國
王ノ制可ヲ經テ財政案ヲ發シタリ其立憲主義ヲ行フニ當
テ當時ノ宰相カムフウゼン氏ハ白耳義ノ憲法ヨリ現行憲
法ノ第九十九條ヲ模造セリ其文ニ曰ク政府ノ歳入及歳出
ハ總テ毎年之ヲ豫算シ豫算表ニ編制ス可シ此豫算表ハ每
年法律ヲ以テ確定スト是ニ於テ政府ノ歳入歳出一トシテ
上下兩院ノ承認ニ服セサル者ナク當時ノ世論之ヲ以テ立
憲國ノ豫算法ノ當然ニ施行セラレタル者トセリ
然レモ之ヲ實施スルニ當リ大困難ニ遭遇セリ政府一切ノ
歳入若果シテ議會ノ承認ニ服スルモハ國庫ノ總收入變シ
テ一年限ノ者トナリ豫算法ハ國庫收入ヲ規定スル無二ノ

法律トナリ白耳義憲法ニ所謂凡ソ租税ハ歲計豫算表ニ掲ケタル者ニ非サレハ徴收ス可カラストノ條則ニ同シキ者ナル可シ此條則ハ白耳義國ノ主權在民主義ニ在テハ自ラ然ラサルヲ得サル者アリト雖モ立憲君主國ニ在テ憲法ノ諸條則ヲ以テ其基礎ヲ固クセント欲シナカラ議會ヲシテ豫算議定權ヲ以テ毎年法律上ノ施設ヲ變更セシムルコトヲ許スカ如キハ決シテ並ヒ行ハレサル條則ナリ故ニ千八百四十八年ノ憲法草案ニハ一年限云々ノ語ヲ削リ白耳義憲法ノ第一百十條ノ文ニ一句ヲ挿入シテ左ノ如キ一條ヲナセリ

國庫ニ入ル可キ租税ハ豫算表ニ掲載シタル者又ハ別法ノ命スル者ニ非サレハ徴收ス可カラス

此ノ如クシテ白耳義憲法ノ精神ヲ變改シ又其法理ヲ廢棄

シ豫算法ハ歲入ヲ決定スルノ根據ニ非スシテ租税ニ關スル法律ヲ以テ歲入ヲ決シ國庫ノ收入ハ永久牢固ノ者トナレリ且政府ハ現行ノ税法及行政法ニ効力ヲ有セシメントシタルヲ疑ナシ故ニ其憲法ニ左ノ二則ヲ添加セリ

第八十二條、現在ノ租税ハ法律ヲ以テ之ヲ變改スルマテ總テ舊ニ依ル可シ

第八十三條、此憲法ニ抵觸セサル現行法律規則ハ依然其効力ヲ有スル者トス

當時國民會委員ハ八十二條ヲ採用シ第八十三條ヲ左ノ如ク修正シテ今ノ第九九條ノ文トス

凡ソ現行法令全書中ニ在ル條款及各個ノ法律規則ニシテ此憲法ニ抵觸セサル者ハ法律ヲ以テ變改スルマテ其効力ヲ有ス可シ

此條則ニ矛盾アルヲ免カレサルヲ以テ自由主義ノ者ハ添加ノ二條ヲ以テ假設ノ規定トセント欲セリ千八百四十八年十二月五日ノ欽定憲法ハ後ノ添加文ヲ通則ニ入レテ假定ノ意義ヲ減シタリ此草案其儘採用セラレ政府資産ヲ永久ノ者トシ國稅ヲ法律上確定ノ者トスルノ原則ヲ固守スルコトナレリ

以上ハ歲入ニ關スル者ナリ若夫歲出ニ至テハ竟ニ一大缺漏アルヲ免カレス白耳義ニ模倣セル第九十九條ニ曰ク政府一切ノ歲出ハ毎年之ヲ豫算表ニ掲載ス可シ此豫算表ハ毎年法律ヲ以テ確定ス

此文ニ據ルキハ政府ノ費用ハ何ノ種類ヲ問ハス必ス代議院ノ承認ヲ經サル可カラス否サル者ハ法律ニ觸レタル費用ト謂フニ至ル可シ抑憲法及行政法ハ大臣ニ負ハシムル

ニ重大ノ義務ヲ以テセリ此義務ヲ果スニハ費用ヲ要スル者ナリ此義務ヲ果サ、ルキハ之ヲ憲法違犯ト曰ハン此義務ヲ果スモ豫算法中其費用ナキキハ是モ亦憲法違犯ト曰ハン豈矛盾ノ甚キ者ニ非スヤ

歳計豫算法確定ニ至ラサル場合ニ於テ當時既ニ一定ノ法律ヲ要シ獨逸聯邦ノ憲法ハ其必要ヲ認メ相當ノ配慮ヲナセリ學國憲法ノ審査ニ當テモ此事ニ配慮スルノ發議アリタレモ採用ニ至ラス千八百六十四年ニ此缺典ヲ補充セントノ計畫アリシモ其効ヲ奏セス内閣ト議會トノ爭議アレハ其判決ハ世上ノ政論ニ任ス一方ニ於テハ豫算法議定ナキ場合ニハ政府專斷ヲ以テ歲出入ヲ決スルモ不可ナルヲナシト主張シ一方ニ於テハ豫算法ナキキハ政府歲出ヲナス可カラスト主張セリ二ツノ者共ニ極端ニ走り妥當ノ說

ニ非ス
又豫算超過ノ場合ニ在テ之カ規定ヲ設クルハ緊要ナリ然
ルニ李國憲法ハ僅ニ左ノ如キ第四百四條ノ短文アルノミナ
リ
豫算定額ノ超過ハ代議院ニ向テ事後ノ承認ヲ求ム可シ
此條則ノ不完全ナルヲハ憲法制定後已ニ之ヲ發見セリ世
上ノ政論及一個人ノ思想共ニ此點ニ於テ廣大ナル餘地ヲ
有シ議論錯出シテ彼ノ先入主トナレル所ノ理想常ニ最多
數ヲ占メ所謂代議院ノ委任ナキ歳出ハ之ヲナス可カラズ
トノ說最勢力多ク此理想ト法律上ノ行政權トノ矛盾ハ嘗
テ消滅スルコトナク唯紛議ノ起ル毎ニ双方ヲ調停シテ之ヲ
彌縫スルノミ
前ニ英國佛國ノ豫算法ヲ論シ其大同小異ナル五原則ニ付

キ獨逸各邦實踐スル所ノ通則ヲ示サントス
第一、豫算法ヲ司法及行政上ノ法律ノ下ニ置ク可キ原則ハ
獨逸古來ノ法制ニ本ツキ二三邦國ノ憲法ハ歳出承認權ヲ
制限センコトヲ試ミタル者アリ又中等國ノ憲法ニ於テハ明
ニ「タッキンクス、ビル」ノ禁ヲ掲ケタリ李國ノ憲法此事ニ關シ
テハ政府ト議院ト各其意見ヲ異ニスルヲ以テ正當ノ解釋
ヲ得ントスルノ希望アルハ實ニ當然ノコナル可シ
憲法發布前ニモ歳計豫算表アリテ且之ヲ公布シタリ又法
律ヲモ公布シタリ此歳計豫算表ヲ一般ノ法律ト同視スル
コトヲ得可キ者ナルヤ豫算表ハ未タ嘗テ直接ニ人民ニ向フ
テ命令禁止スルコトナク又表中記載ノ金額ヲ必ス徵收シ必
ス支出スルノ義務ヲ官衙ニ負ハシムルニ非ス只豫メ收入
支出ヲ秤量シタル所ノ計畫案ナリ固リ概略ノ推測ニ止マ

ルヲ以テ實踐ノ際變更セラレ得可キ者ナリ而シテ之ニ命
令書ヲ附シテ實施方法ヲ訓令スル者ナリ故ニ豫算表ハ國
會ノ議ヲ經タル實施令ニ異ナラス此事ハ英國ノ慣例ニ於
テ甚明ナリ往時英國ニ於テ出納官ニ交付スル國王ノ總訓
令ハ或ル年度ニ於テハ議院ノ議ニ付シ或ル年度ニ於テハ
然ラサレハ縱ヒ英國ニテモ實施規則ヲ法律ト稱スト雖ヒ
該案ノ固有セル實施規則ノ本性ヲ變スルヲナシ此等ノ事
ヲ講明シ始メタル以來豫算ノ本義ヲ論スルニ於テ皆其歸
着ヲ一ニスルニ至レリ此實ニ「ラバント」氏ノ功勞ト謂ハサ
ルヲ得ス氏ハ歲計豫算ハ法律ノ形式ヲ具ヘタル行政規令
ナリ其行政規令ハ上下兩院ノ意見ヲ以テ眞ノ法律ニ變ス
可カラサル者ナリト曰ヘリ又此理ヲ推シテ豫算ノ審議ハ
本來ノ法律ノ範圍内ニ於テ運動ス可キ者ナリト斷言セリ

此等ノ說アルニモ拘ハラス各政黨ハ學問上一致シタル說
ヲ採ラス且自ラ其說ヲナシテ曰ク實際ニ於テハ學者ノ唱
フルカ如キ者ニ非ス豫算ハ憲法ニ於テ明ニ法律ト稱スル
ヲ以テ其性質ハ他ノ法律ト毫モ異ナルヲナカル可シ縱ヒ
佛白ノ二國ニ於テ其解釋ヲ異ニスルモ又縱ヒ巴威里亞、瓦
敦堡索遜、巴丁ノ諸國ニ於テ豫算ノ決議ヲ制限スルモ學國
ニ於テハ憲法ニ依リ無限絶對ノ歲出承認權ナル者ヲ存シ
要スルニ此權ハ學國代議院ノ權利中特別ノ者タル可シト
此ノ如キ者殆ト輿論ナルカ如シト雖ヒ然レモ其輿論タル
我行政法ヲ攪亂シ司法及憲法ヲモ震動シ政府ト雖ヒ法律
ノ範圍内ニ於テ運動ス可キ主義ト牴觸シテ國家ニ對スル
利益ヲハ到底望ム可カラサル者ナリトス
第二、豫算超過ニ對スル大臣ノ責任ハ獨逸各邦ノ議院ニ於

テ常ニ固守スル所ノ原則ナリ。李國ニ於テハ憲法第六十一條ヲ以テ憲法違反ニ關スル大臣ノ告訴ヲ許シタリ。故ニ其職務上ノ行爲ニ付テモ亦法律上ノ責任ヲ負フハ固リ當然ノ事ナリトス。然レモ此事ニ關スル裁判ハ未タ其例ヲ見スシテ一種特異ノ思想大ニ流行シ。民事委任ノ法理ヲ以テ國法上ノ問題ヲ決セント欲スルヨリ豫算超過ヲナサシメタル大臣ニ對シテ民事ノ訴訟ヲ起シ損害賠償ヲナサシメントス。國法上ノ原則ニ據レハ決シテナシ得可キコトニ非ス。豫算ハ大臣ニ對シテ無二ノ規定ニ非ス。憲法及行政法ノ如キハ大臣ノ爲ニ最重要ノ規定ナリ。此等ヲ標準トシテ其當否ヲ判斷スルコトヲ得可シ。白耳義國ノ如キハ豫算ヲ以テ毎年代議院ヨリ大臣ニ交付スル委任狀ト視做シタルモ其憲法上ノ理義ヲ擴充シテ損害賠償ノ訴ヲ起スコトナシ。佛蘭西モ

亦然リ。況ヤ主權在民主義ノ國ニ非サルキ於テオヤ。第三豫算科目ヲ議スルノ程度ハ獨逸ニ於テハ英佛二國ト同シカラヌ。一種特別ノ審議法ヲ用ヒタリ。獨逸ノ風トシテ人々各議案ヲ少々ニテモ修正センコトヲ欲シ其細件ニ至ルマテ其意見ヲ行ハントス。政府ハ議院ノ有無ニ拘ハラヌ。常ニ節儉ヲ主トスル者ナルニ彼ノ英佛議院ニ於テ數十年間ニ削除シタル費目ヨリモ更ニ數多ナル費目ヲ一年內ニ削除スルノ慣例ヲ大ニ僅ニ二三時間ノ審議ニ於テ口頭ノ辨論ニ由テ事ヲ決スルヲ以テ實務ノ形況ト實際ノ需用トニ適セサルコト往々之アリ。往時貴族會ヨリ王室ニ定期補助金ヲ納メタルノ制一變シテ固定ノ租稅トナル中ニ當リ歐洲各國ハ一種若クハ數種ノ浮動稅ヲ議セシメ獨逸ノ中等國及數小國ニ於テモ亦定

期變改ス可キ租稅ヲ設ケテ代議院ニ付ナルニ古來政費承認ノ權ヲ以テセリ獨字國ハ其立憲政體トナルニ當リテ新稅ノ補助ヲ要セサル故他國ノ如キ承認ヲ要スルコトナカル可キモ豫算論者ハ猶古來ノ承認權ヲ固守シテ年々ノ抗爭止ムコトナク科目類別モ從フテ繁多トナリ千八百七十八年歲入ニ於テ二百六十四項歲出ニ於テ千四百六十項臨時歲出ニ於テ三百六項ヲ設ケ逐一ニ院議ヲ取リ議事録ヲシテ徒ニ肥大ナラシムルノミ試ニ之ヲ他國ト比較スルニ英國ニ於テ八千八百七十八年ニ海軍費十七項陸軍費二十五項其他ヲ七款百四十項收稅費五項合計百八十七項ニ過キス佛國ニ於テハ今日ノ共和政府ニ至リ費目ヲ增加スト雖モ司法十六項外交十五項內務四十項財務十四項收稅事務四十七項陸軍二十七項海軍及殖民事務二十六項教育三十八

項美術其他ノ經費十五項宗教二十項農商事務二十七項土木六十五項合計三百四十六項ナリ
千百ノ費目ニ付キ逐一討論シテ且其削除シタル費目ヲ全額ヨリ扣除スルカ如キ固ヨリ煩雜ノコトナリ又字國ノ豫算ハ獨逸帝國ノ豫算ニ連絡アルヲ以テ其煩雜ハ更ニ甚シトス時トシテ官吏ノ俸給及職務上ノ收入ヲ減セントスルニ當リ官吏ハ之カ爲ニ幾千通ノ請願書ヲ議院ニ送り議院ハ一費ヲ削除スル毎ニ其關係者ニ抗抵セサル可カラス豫算承認權ヲ濫用スルノ結果ハ當ニ其目的ヲ達セサルノミナラス却テ其目的ニ反對セル結果ヲ生スル者ナリ蓋其目的ハ節儉ヲ主トシテ行政ノ改良、財政ノ整理ヲ便ニスルニ在ル可ケレモ反對ノ結果ヲ生スル所以ノ者ハ左ノ如シ若費目ヲ細分シテ之ヲ議定センニ一旦承認セラレタル費

目ヲ支出スルニ當テ主務官吏ハ實際ノ便益ト節儉ノ方法
ヲ顧ルニ違アラス又其名譽ヲ顧ルニ違アラステ議決ノ
通ニ之ヲ支出ス可シ別ニ必要ノ支出ス可キ者アルハ到
底之ヲ他ノ費目ニ求メサルコトヲ得ス節儉主義ヲ達スルニ
此方法ヲ以テセハ豈困難ノコトニ非スヤ或ハ曰ク豫算ノ審
議細目ニ涉ルハ行政事務ヲ振勵スル者ニシテ即行政ノ改
良ヲ促ス者ナリト此説ハ議會ヲシテ行政事務ニ對シテ責
任アル官吏ト混同セシムル者ナリ議會ヲシテ行政ヲ監督
スルノ地位ヲ離レ殆ト自ラ行政事務ヲ執ラシムル者ナリ
行政官吏ヲシテ行政ノ改良ヲ謀ラシムルハ其行政法ノ範
圍内ニ在テ獨立ノ運動ヲナサシムルニ在リ然ラスシテ行
政ノ改良ヲ欲スルモ決シテ得可カラス又豫算議定權濫用
ノ弊害ハ財政ノ整理ニ便ニセスシテ却テ之ヲ麻痺セシム

可シ歳出歳入ノ細目ヲ議スルニ由リ議會ハ恰モ大藏大臣
ニ代ルカ如クニシテ一切ノ處分ヲ負擔スルハ成功ヲ數
年ノ後ニ見ル可キ財政改良法ノ如キハ之ヲ施行スルコト能
ハサル可シ豫算委員ハ皆財政ニ長スルコト少シモ大藏大臣
ニ讓ルコトナシト假定スルモ多數ノ人且毎年變更ス可キ人
々ニシテ其數年ニ涉テ變動ナキコトヲ保ス可カラス又財政
ニ於テハ何人モ其責ニ任スル者ナキニ至ル可シ
第四、決算報告及責任解除ノ制ハ既ニ千八百七十二年三月
七日ノ會計検査院條規ヲ以テ其目的ヲ達シタル後尙其規
制ノ完全ナラシコトヲ勉メ之ニ由リ冥々中ニ官吏ノ專横ヲ
抑メ各大臣ヲシテ其身及私産ヲ以テ其責任ニ當ラシメン
トス此希圖ニシテ單ニ豫算遵守ノ監督ニ止リ并ニ大臣告
訴ノ爲豫算超過ノコトヲ明ニスルニ止ルハ固ヨリ不可ナ

ルコナカル可シ然レモ豫算及決算ノ二途ニ依リ大臣責任ノ原則ヲ變更セントスルハ不可ナリ蓋豫算ニ關スル規制ハ重要ノコニ相違ナケレモ之ヲ以テ他ノ法律ヨリ重シトスルコヲ得ス大臣ハ最重要キ憲法ト行政法ノ規定ニ依リ其事務ヲ處置スルノ權利及義務ヲ有スル者ナリ

第五、豫算全廢ノ權ハ佛白二國ノ主權在民主義ヨリ生スル者ニシテ獨逸國法ノ原則ニ於テハ存立スルコヲ得サル者トス然ルモ民主主義ノ論者ハ代議院委任令ヲ發スルノ思想ヲ抱キ千八百四十八年學國國民會議ハ此權利ヲ施行セント欲シ爾後憲法爭議ノ起ル毎ニ豫算全廢ヲ以テ大臣ヲシテ其地位ニ立ツコヲ得サヲシメントシタレモ贊成者少クシテ其説行ハレス然レモ豫算全廢ノ權アリトスルノ説ハ未タ消滅セス且豫算ノ不承認トナリタルモ大臣ハ其職

ヲ辭セサル可カラストノ説モ未タ消滅セス學國ニ於テ豫算審議ニ關スル三十年間ノ事實モ大抵同様ノ觀ヲ呈セリ千八百五十年乃至五十七年黨派軋轢ノ盛ナルモハ意外ニ穩和ナルモ政府ノ處置正當ナルノ際却テ政府ニ反對スルコト甚タ勞力ヲ厭ハス汲々之ヲ辨論セリ幸ニシテ其一致ヲ得タルハ政府ノ能ク謙退シテ豫算議定權ヲ縮小ニスル嫌ヲ避ケタルニ由ル者ナリ

歳計豫算論の本文ニ述フル所ノ者ハ即「グナイスト」氏及他書ニ載スル説ニ過キスシテ毫モ余輩ノ私説ヲ附加シタル者ニ非ス讀者須ク之ニ由テ英佛白耳義獨逸諸國ノ歳計豫算ニ於ケル來歴ト實況トヲ考察シ外國ノ利弊ヲ鑑ミ其中ノ穩當ナル方法ヲ擇フコトヲ得可シ蓋此豫算ノ事ニ關シテハ我帝國ニ於テ未タ十分ノ經驗アラズ從フテ其利害得失ヲ論究スルノ材料アラズ余輩ノ切ニ望ム所ノ者ハ外國ニ於テ實驗セル者ノ中ニ就テ趨避ノ方針ヲ定メテ以テ豫算案ヲ議スルノ標準トセンコトヲ豫算案ヲ議スルニ當テモ亦我憲法ヲ服膺ス可キコトハ固リ言フ待タサル所ナリ且憲法ハ人々ノ諳熟スル所ナリ然レモ佛白二國ノ憲法ニ掲載セル主義夙ニ腦裏ニ横ハリタル人ノ如キハ夫所謂先入主ト爲ルノ習ニテ動スレハ其解釋

上文ニ述フル所ノ者ハ即「グナイスト」氏及他書ニ載スル説ニ過キスシテ毫モ余輩ノ私説ヲ附加シタル者ニ非ス讀者須ク之ニ由テ英佛白耳義獨逸諸國ノ歳計豫算ニ於ケル來歴ト實況トヲ考察シ外國ノ利弊ヲ鑑ミ其中ノ穩當ナル方法ヲ擇フコトヲ得可シ蓋此豫算ノ事ニ關シテハ我帝國ニ於テ未タ十分ノ經驗アラズ從フテ其利害得失ヲ論究スルノ材料アラズ余輩ノ切ニ望ム所ノ者ハ外國ニ於テ實驗セル者ノ中ニ就テ趨避ノ方針ヲ定メテ以テ豫算案ヲ議スルノ標準トセンコトヲ豫算案ヲ議スルニ當テモ亦我憲法ヲ服膺ス可キコトハ固リ言フ待タサル所ナリ且憲法ハ人々ノ諳熟スル所ナリ然レモ佛白二國ノ憲法ニ掲載セル主義夙ニ腦裏ニ横ハリタル人ノ如キハ夫所謂先入主ト爲ルノ習ニテ動スレハ其解釋

ヲ異ニシ無限絶對ノ豫算承認權ノ使用ヲ試ミント欲スル
 ハ余輩ノ竊ニ惑フ所ナリ
 豫算ニ關スルノ規定ハ載セテ憲法第六章ニ在リ而シテ其
 第六十四條以下ノ諸條ニ詳ナリ議院法ニ於テモ亦其第八
 章ニ於テ豫算案議定ノ方法ヲ掲ケタリ今試ニ之ヲ以テ前
 ニ列記セル「グナイスト」氏カ各國ノ豫算ニ關スル事項ヲ比
 較セル五原則ト比較スルルハ我憲法ノ精神ハ左ノ如ク演
 繹スルヲ得可シ
 第一、豫算ヲ司法及行政上ノ法律ト下ニ置キタルコトニ付テ
 ハ我國ノ憲法ハ他國ノ憲法ト大ニ其旨趣ヲ異ニセリ前ニ
 擧ケタル諸國ノ憲法ニテハ大抵豫算ヲ以テ法律若クハ法
 律ノ如キ者ト視做セルヲ以テ豫算ノ影響ハ延テ他ノ法律
 ニ及ヒ之ヲシテ常ニ起滅不測ノ地位ニ在ラシム可ク而シ

テ豫算ハ本來ノ性質ニ於テ他ノ法律ト同視ス可カラサル
 ヲ以テ豫算ヲ他ノ法律ト下ニ置カサルハ自然ノ勢ナリ然レ
 モ我憲法ニ於テハ明ニ豫算ヲ以テ他ノ法律ト區別セルヲ
 以テ他ノ法律ト其座位ノ高下ヲ争フコトナク又其高下ヲ論
 究スルノ必要ナカル可シ但豫算ヲ以テ眞ノ法律ニ非スト
 スルノ説ハ獨逸ノ「ラハント」氏其著セル「歲計豫算論」一書
 ニ於テ殊ニ之ヲ詳ニセリ其説ニ據レハ凡ソ法律ト稱ス可
 キ者ハ一ノ規定ニシテ人ヲシテ服從セシム可キ者ナルカ
 日ク然ラス譬へハ公使ニ命令スルニ外交上ノ書類ヲ送達
 スルヲ以テ將校ニ命令スルニ轉營ス可キヲ以テスルカ
 如キ人ヲ羈束スルニ足ラサル者ナシ而シテ此命令ハ法律
 ニ非サル可シ然ラハ則事ノ全體ニ渉ル者ニシテ一事一行
 ニ止マラサル者ハ法律トナス可キカ日ク然ラス夫諸官

應ニ與フルニ訓令ヲ以テスルカ如キ其効力及フ所廣汎
 ナレトモ其廣汎ナルノ故ヲ以テ法律タルノ性質ヲ有スル者
 ト曰フ可カラス然ラハ則如何ナル規定ニシテ始メテ之ヲ
 法律ト稱ス可キカ曰ク法律タルノ性質ヲ有スル者ニシテ
 始メテ之ヲ法律ト曰フ可シ即事件ノ何タルヲ問ハス各個
 人又ハ一國ニ係ル權利ノ範圍ヲ定ムル者ニシテ始メテ之
 ヲ法律ト曰フコトヲ得可シ然レトモ立法ノ區域ニ畫定シ正鵠
 ヲ失ハザラシムルコトハ難中ノ至難ニシテ何等ノ點線ヲ以
 テ之カ限界トナス可キカ望洋ノ歎ナキニ非スト雖モ全ク
 其限界ナキニ非ス只普通ノ場合ニ在テハ平心ニ尋常ノ者
 察ラ下スルハ何等ノ困難ナクシテ其限界ヲ示シテ明白ナラ
 シムルコトヲ得可シ歳計豫算ハ本法法律上ノ條規ヲ有ス可キ
 者ニ非ス又實體ノ法律ニ非ス歳計豫算ハ一個ノ計算書ヲ

ルニ過キス一個ノ計算書ニ於テハ何等ノ規定ヲモ包含ス
 可キ者ニ非スシテ一個ノ事實ヲ定ムルニ過キス即數字ヲ
 用ヒテ將來ノ歳入歳出ヲ表示スル者ナリ歳計豫算ハ收入
 支出ノ義務ヲ生ゼシム可キ者ニ非スシテ收入支出ノ義務
 ハ他ノ法律ヨリ生ズル者ナリ此法律ノ効力ニ由テ始メテ
 歳計ヲシテ必要ナラシムル者ナリ歳計ハ一ノ權利ヲ生ゼ
 ス只財政上收入支出ヲ整頓スルヲ目的トスルニ外テ豫
 算ノ議定ヲ要スル所以又者ハ法律ニ在ラズテ經濟ノ
 點ニ在ル者ナリトス是故ニ將來ノ收支ヲ定メテ豫算ヲ設
 クルモ又既往ノ出納ヲ勘査シテ決算ヲ設クルモ共ニ立法
 行爲ニ關スル者ニ非スシテ純然タル行政ノ範圍内ニ在
 ル者ナリ而シテ代議院ノ之ニ參與スルノ權利ヲ有シ豫算
 決算共ニ代議院ノ承認ヲ要スル所以ノ者ハ其立法權ニ參

與スルノ爲ニ非スニテ行政權ニ參與スルニ起因スル者ヲ
 リ彼ノ所謂立法權ト名テ行政權ト稱スル者ハ本社撰
 説ニ從ヒ國家ノ權力ハ必ス分掌セサル可カラズ固
 ヲ生天ル者ナリ此其大略ナリ其對シテ重大ノ關係ヲ
 豫算ノ法律タルヤ否ノ問題ハ豫算ニ對シテ重大ノ關係ヲ
 有スル者ナリ若果シテ之ヲ以テ眞ノ法律ト視做スル他
 ノ永遠不動ノ法律ト並立シテ並行セラル者トナリ毎年議
 定ス可キ法律ヲ以テ永遠不動ノ法律ヲ左右スルニ至ル可
 ク從フテ吾人ノ權利義務ヲ規定シ吾人ノ生命財產ヲ保護
 スル法律ノ恩惠ヲ蒙ルトナカル可ク國家ハ殆ト十日
 立スルヲ能ハサル可シ此即英國ニテ、タ、キン、グ、ス、ピ、ル、ノ、禁
 刑所以ホリシカノ大ヲ豫算ヲシテ果シテ法律ナラ
 シムルハ法律ハ毫髮モ違犯スルトテ得タル者ニシテ若

踰越スルハ其制裁ヲ受ケサルコトヲ得サルニ由リ豫算ノ
 各款各項ニ一モ適合セサルハ直ニ豫算違犯ノ罪トナラ
 サルヲ得ス彼ノ常ニ變動ス可キ性質ヲ有セル歳入歳出ニ
 シテ豫算ニ現出シタル一定ノ數字ヨリ多キモ少キモ皆是
 豫算違犯ニシテ行政官吏タル者ハ常ニ過失アル人トナラ
 サルコトヲ得ス萬一其過失ヲ免ル、者アルハ本個人ヲ使
 用スルト何ヲ擇ハシヤ、
 此ノ如ク論シ來レハ豫算ノ法律ニ非サルコト頗ル明白ナル
 カ如シト雖モ各國ニ於テ一種ノ疑問トナリ學者ノ講究ヲ
 要スル所以ノ者ハ豫算ノ他ノ法律ト共ニ議會ノ議ニ由テ
 定マルト議會ハ即立法府ニシテ議員ハ即立法者タルヲ以
 テ混同スルコト已ニ久ク遂ニハ豫算案ヲ名ケテ豫算ノ法律
 案ト曰フニ至リ直ニ豫算ヲ以テ法律トスル者ノ如ク否

ルモ亦一種ノ慣用語ヲ使用スルニ由テ憲法ヲ解釋ヲ困難
 ナラシム假如ヘハ學國ノ憲法ハ第九十九條ニ曰ヘル歲計
 豫算ハ毎年法律ヲ以テ之ヲ定ムトアルカ如キ是ナリ法律
 ヲ以テ之ヲ定ムトハ猶歲計豫算ハ毎年國王及兩院ノ合意
 ニ因テ之ヲ定ムト曰フカ如キ者ナル可ケレモ或ハ定メテ
 法律トスト曰ハンカ如キ解釋ヲナス者ナキニ非ス我憲法
 ノ第五十七條ニ裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトア
 ルカ如キ第六十二條ニ新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スル
 ハ法律ヲ以テ之ヲ定ムトアルカ如キノ類ハ固ヨリ眞ノ法
 律ナリトス學國憲法ノ第九十九條ニ所謂法律ヲ以テ之ヲ
 定ムル者ト語同フシテ義同シカラズ我憲法ニ於テハ明ニ
 法律ト豫算トノ區別ヲナシ法律ハ天皇ノ裁可及兩院ノ協
 賛ヲ要スル者ナレモ豫算ハ單ニ帝國議會ノ協賛ヲ要スル

者トシテ彼慣用語ノ誤解ヲ來スル弊ヲ避ケタルノ要ヲ
 ス實際ノ手續ニ於テモ亦其輕重ヲ別テル者ナリ
 第二、豫算超過ニ對スル大臣ノ責任ニ付テハ余輩ノ未タ經
 驗セサル所ナリ然レモ憲法第六十四條ニ曰ク豫算ノ款項
 ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルハ後日帝國
 議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ストアルハ此規定ニ遵ハサル可
 カラサルハ固リ言ヲ待タズ而シテ其承諾ヲ得サル場合ニ
 於テ大臣ハ憲法第五十五條ニ依リ其責ニ任セサル可カラ
 ス然レモ豫算超過ノ事實ハ深ク之ヲ考ヘサル可カラズ原
 來豫算ハ所謂豫算ニシテ單ニ前數年ノ平均ニ依リ歲入歲
 出ノ概算ヲナシタル計算書ニ外ナラサルヲ以テ固ヨリ苛
 細ニ之ヲ論ス可キ者ニ非ス此場合ニ於テ政府ヨリ議會ノ
 承諾ヲ求ムル者ハ所謂事後ノ承認ヲ求ムル者ナリ猶豫算

ノ事前ノ承認ヲルニ異ナラス事後ノ承認ハ原豫算ノ補足
 及修正ニ外ナラサル者ナリ
 然ルニ外國ニテ此事ニ付キ三種ノ説ヲナス者アリ其一説
 ニ曰ク歳計ノ細目ハ一ニ政府ノ宜ク遵奉ス可キ所ニシテ
 毫釐モ之ト違フ可カラズ縦ヒ他ノ費目ヲ節減シテ其不足
 ヲ填補スルコトヲ得ル者ト雖モ歳計法ニ流用ヲ許サハル限
 リハ一支出タリトモ掲載ノ定額ヲ超過ス可カラズト又
 一説ニ曰ク歳計ノ總額經常費ノ總額及臨時費ノ總額此等
 ノミ政府ヲシテ必ス遵守セシム可キ者ナリ是ヲ以テ國家
 行政ノ總費額ヲシテ法律ニ由テ確定セル領域ヲ出テサラ
 シムル限リハ縦ヒ各費目ニ増減ヲ生スルモ未ダ之ヲ以テ
 豫算違反トス可カラズト前説ニ據ルハ政府ノ行政ニ束
 縛ヲ與ヘ大ニ其活動ヲシテ困難ナラシムル者ナリ又後説

ニ據ルハ議會ノ逐條審議ニ當リ削除減少シタル一切ノ
 議決ヲシテ無効タラシムル者ナリ議會ノ議ハ歳計ノ總金
 額ニ對シテ只一回ノ議決ヲナシテ足レリ各目ヲ審議スル
 ハ徒勞タルニ過キス故ニ此二説ノ如キハ共ニ極端論ニシ
 テ取ルニ足ラサル者トス我憲法ニハ明文ヲ掲ケテ款項ニ
 超過スト曰ヘルハ恰モ此疑ヲ判斷スル者ニシテ其超過ト
 ハ細目ニ非サルコト知ル可シ又其總額ニ非サルコト亦知ル可
 シ
 豫算ノ外ニ生シタル支出ニ至テハ亦頗ル考察ヲ要スル者
 ナリ我憲法ハ國家ノ費用ハ單ニ豫算案ノ能ク包含スル所
 ニ非サルヲ以テ其第六十九條ヲ設ケテ避ク可カラサル豫
 算ノ不足ヲ補フ爲ニ又豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ
 充ツル爲ニ豫備費ヲ設ク可シトアレハ縦ヒ豫算外ノ者タ

其豫算中ノ者ニ異ナルコトナシ若又豫備費モ不足スル場
 合ニ遭遇スルモ又猶豫算ノ不足ヲ補フ爲ノ費目ニ外ナラ
 ス此等ヲ以テ漫ニ豫算超過ト視做シ異議ヲ容ル可カラス
 若又豫算超過ニシテ行政官吏ノ之ヲ支出スルニ非法專擅
 ノ事アルニ於テハ此則別ニ論ス可キ者ニシテ議院法ニ規
 定セル質問ノ法ニ依リ又憲法ニ明許セル上奏ノ法ニ依リ
 大臣ヲシ夫其責ニ任セシム可シ此時ニ於テハ過失アル大
 臣ハ其地位ヲ保ツコトヲ得サル可シ
 第三、豫算科目ヲ議スルノ程度ニ至テハ我憲法ノ完全ナル
 ニ拘ハラヌ之ヲ明示シタル條則ヲ見ス豫算超過ニ關シテ
 ハ款項ニ超過ストアレモ豫算ヲ議スルニ至テハ此ノ如キ
 ノ制限ナシ何等ノ細目ニ干渉スルモ妨ナキ者ノ如シト雖
 モ議會ニ附スル總豫算ハ款項ニ止マルヲ以テ只款項ノミ

議ス可キ者ナル可シ夫憲法ヲ以テ議會ニ豫算ノ協賛權ヲ
 附與セラレタル上ハ其權ヲ拋棄ス可ガテサルハ勿論ナリ
 ト雖モ憲法其他ノ法律及行政法ノ爲ニ制限セラレ自ラ其
 範圍ノ内ニ於テ運動セサル可カラヌ又行政上ノ實際ヲモ
 顧ミサル可カラヌ憲法ノ規定ニ據レハ歳計金額ハ之ヲ分
 テ三トカシ其一ハ則皇室經費ニシテ増額ヲ要スルニ至ル
 迄ハ議會固リ喙ヲ容ル所ナシ其二ハ憲法上ノ大權ニ基
 ツケル既定ノ歳出ナリ法律ノ結果ニ由ルノ歳出ナリ法律
 上政府ノ義務ニ屬スル歳出ナリ此三ノ者ハ豫メ政府ノ同
 意ヲ得テ始メテ審議決定スルコトヲ得可キ者ナリ以上ノ二
 者ニ屬セサル者ハ則議會ノ自由ニ審議決定スルコトヲ得ル
 者ナリ而シテ歳入ノ如キ率子法律ノ結果ニ由テ徵收スル
 者ナルヲ以テ之ヲ議スルニ當テ只其法ニ依リ徵收シタル

者ナルヤ否ヲ監督スルニ止マル可シ但其官有物ニ對スル
 收入等ノ如キハ稍特別ノ注意ヲ要ス可キ者ナリ此ノ如キ
 區別ニ付キ議員ノ用意ト注目トニ於テ自ラ輕重厚薄ノ差
 ヲ生ス可キハ勿論ニシテ常ニ忘ル可カラサル者ハ豫算ノ
 性質ナリ豫算ハ數年平均ノ概數ヲ示シタル計算書ニ外ナ
 ラサルヲ以テ縦ヒ當局者ト雖モ收支入共ニ豫算ノ額ニ
 符合スルヲ保ス可キ者ニ非ス若其細目ニ涉リ苛察ニ之
 ヲ論スルモ到底其効ナキノミナラス行政官吏ヲシテ一ニ
 其議決シタル細目マテヲ遵守セシメント欲スルハ行政
 官吏ハ一モ自由ナル運動ヲナス不能ハスシテ其儘ニ支出
 スルヲ以テ節儉ノ主旨ヲ達スル不能ハサル可シ
 此項ニ援引セル憲法第六十七條ハ世人ノ一大疑問トナ
 リ之カ爲書ヲ著シテ辨明スル者アルニ至レリ其大意ハ

前ニ解釋スル者ト異ナルヲナクシテ要スルニ詳略アル
 ニ過キス爰ニ之ヲ詳ニスルヲ要セサル可シ然レモ此條
 ノ如キ者ヲ外國ノ憲法中ニ多ク見サルヲ以テ我國ニ於
 テ特ニ一種ノ規定ヲ設クル者タル可シト思ヘル者少カ
 ラス然レトモ豫算審議ノ權ニ制限ヲ設クルハ說ハ輒近
 ノ發達ニ係ル者ニシテ其例ナキノ非ス「ボ」ハ「ウ」氏著
 論ニ據ルニ瑞典ニ於テハ國會ニシテ歳出ヲ削減シ現在
 ノ建設事業ヲ繼續スルニ足ラサル場合ニ於テハ國王ノ
 認許ヲ得スシテ之ヲ決議スルヲ能ハストアリ「フ」ラ「ン」シ
 ヲ「イ」ヒ憲法第七十三條ニ「豪族會議ハ國家ノ目的ヲ達
 スルニ必要ナル費額ヲ承諾スルノ權及義務ヲ有ストア
 リ」タルデン「ベル」ヒ憲法第八十七條ニ「第二項議院ハ聯
 邦ノ義務及國ノ憲法ニ適スル政務ノ執行殊ニ聯邦ノ法

律又ハ國ノ法律又ハ私法上ノ義務ヨリ生スル支出ソ爲
 ニ必要ナル現在諸税ノ徵收ヲ拒ムコトヲ得ストアリ同國
 憲法第二百三條ニ此協同ヲ經タル金額ハ之ニ對スル事
 項及目的ノ消滅セサル間國會ヲ承認ナクシテ之ヲ減少
 スルコトヲ得ス索逕憲法第百條ニ國會ハ審査ヲ終ヘタル
 後歲計豫算案ニ關スル意見ヲ國王ニ呈出スルニ其意見
 政府ヲ要求額ヲ減少スル者ニ係ルキハ詳細ノ理由ヲ付
 シ國家ノ目的ヲ誤ルコトナクシテ節減シ得可キ事物及方
 法ヲ明示ス可シトアリ其百三條第百條ニ由リ國會ヨリ
 呈出スル意見及理由ハ政府ニ於テ更ニ熟慮シ國ノ安
 寧福利ヲ破ラサルキハ之ヲ參酌セサル可カラストアリ
 「ハ」トブル憲法第九十一條第三項ニ聯邦又ハ國法又ハ
 私法ニ基キ政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ國會ニ於テ否決

ス可カラストアルカ如キハ豫算審議權ニ制限ヲ付シタ
 ルノ先例ニシテ且我憲法第六十七條ノ由テ以テ成レル
 所ナル可シ而シテ其制限ヲ設クルヤ「フ」ラ「シ」ウ「イ」ヒ「オ」ル
 「デ」ベル「ヒ」及「ハ」ノ「ト」ブル等ノ諸國ニ比スレハ豫算審議權
 ノ範圍更ニ廣濶ナル者トス
 爰ニ又議會ノ宜ク注意ス可キ者アリ夫國家アリテ後ニ憲
 法アリ憲法アリテ後國家アルニ非ズ憲法ヲ發布スル以前
 ノ國家ニ要スル政費ハ憲法ヲ發布スル以後ノ國家ニモ亦
 要スル所ナル可シ恰モ憲法ヲ發布スル以前ニ租税ヲ徵收
 シ其他ノ收入ヲ得可キ行政法ハ憲法ヲ發布スル以後ニモ
 變更スルマテハ何ツマテモ行ハル可キ者ナル可キカ如シ
 我國家ヲ創造スルト同時ニ憲法ヲ設ケ議會ヲ招集シテ政
 費徵收ノ事ヲ審議スルカ如キノ想ヲナス可カラズ故ニ憲

法第六十七條ニ規定シタル者ノ外議會ノ自由ニ議決シテ
 廢除削減スルコトヲ得可キ者ト雖之ニ對シテ其議權ヲ濫
 用ス可カラズハ第四、決算報告責任解除ノ事ニ關シテハ動スレハ第二ノ項
 ニ於テ論述セルカ如キ場合ニ遭遇スルコト少カラサル可シ
 ト雖行政官吏ニ於テ能ク注意シテ豫算違犯ノ過失ナカ
 ラシメ其議院ニ對シ責任ノ解除ヲ得ルコトハ少シモ困難ナ
 ルコトナカル可シ然リト雖豫算ハ前ニモ言ヘルカ如ク概
 略ノ計算書ニ過キス決算ノ時ニ至テ始メテ豫算ノ實蹟ヲ
 見ルコトヲ得タル者ニシテ決算報告ハ豫算ト相須テ歳入歳
 出ノ確實ナル證明ヲナス者ナリ夫ノ議員タル者既ニ歳計
 ニ關スル協賛權ヲ有スル上ハ十分ニ之ヲ検査セサル可カ
 ラス之ヲ検査スルニハ即行政上ノ監督權ヲ行フ者ナリ之

豫算案ノ審議ニ比較スルハ其重要ナルコトヲ知ル可シ
 故ニ豫算審議ニ嚴密ナルヨリ其審議口此際ニ於テ十分ニ檢
 査ヲ行フ可シ此場合ニ於テ大臣タル者若非法專擅ニ支出
 ヲナスニ於テハ毫モ假借スルコトナク其可ナリ然レモ是
 我憲法第七十二條ニ規定スル所ニ於テ帝國議會ニ提出ス
 ル所ノ決算報告ハ法律ヲ以テ規定セザル會計検査院ニ検査
 報告ニ伴ヒ來ル者ナリ故政府ノ提出スル議院ニ現出スルヨ
 リ前ニ於テ已ニ一回嚴重ナル關門ヲ通過シ來ル者ナリ
 此ニ至テ議會ノ検査過嚴ナルモ恐クハ亦徒勞ニ屬センノ
 事畢竟決算報告ニ對シ責任解除ノ手續ヲナス所以ナ者
 豫算遵守ニ監督權ヲ行フ者ニ對シテ豫算超過ニ對シテ恩赦
 ヲ行フニ非ス只議會ニ對シテ大臣ニ對シテ告訴ヲ起ササル
 旨ヲ表スルニ止マル者ト知ル可キ事ニ對シテ主權ヲ失

第五、豫算全廢ノ事ハ固リ嫌惡ス可キ者ニシテ主權在民主
義ノ國ニ非サバ此權利アル可カラズ又立憲君主タル
獨逸國ヲ如キ者動スレバ此說ヲ唱テ其者然レモ此猶
古代ノ租稅拒絕權ヲ使用スルノ遺風ニシテ之ヲ以テ豫算
案ト混同スル者多シ我帝國ハ固リ立憲君主國タルノミナ
ラズ舊來租稅拒絕ノ如キ者ノ之ヲ混同ス可キ者サヘモナ
キ若以テ要スル此事ヲ以テ内閣ヲ恐嚇スル手段トナ
ス者アラサル可シ且我憲法ノ規定ニ據レバ豫算審議ノ權
ニ制限アルヲ以テ如何ナル論者ト雖モ豫算全廢ノ說ヲ主
張スルヲ能ハサル可シ然レモ其他ノ原因ニ由リ適當ノ時
限内ニ議決スルヲ得サカカ如キヨアリテ豫算ヲ不成立
或ハ之ヲ否シテ想像シテ其場合ノ規定ヲ設ク此即我憲
法第七十一條アル所以ニシテ此規定ハ必要缺ク可カラサ

ル者ナリトスルニ其義ニ據リテ其義ニ據リテ其義ニ據リテ
此豫算ヲ全廢シ或ハ成立セサルカ如キ場合ニ在テハ若前
年度ノ豫算ニ依リテ規定ヲカラスハ論者ノ說種々ニ
分レテ一ノ困難ヲ見ルニ至ル可シ外國ニ於テ此規定ヲ設
ケサル前此場合ニ於テ甲乙論者ハ曰ク政府ノ政費ヲ出納
スルコト最早議會ノ爲ニ拘束セラルルコトナク國王ノ命令ヲ
得テ自由ニ之ヲ行フ可シト乙論者ハ乃曰ク此場合ニ於
テハ歲入歲出ノ準則トス可キ者ハ絶テ之アラサルヲ以テ
政府ハ一切ノ收入支出ヲナスコトヲ得スト甲說ニ從ハハ政
府ハ忽專制政府トナルコトヲ得可ク乙說ニ從ハハ國家ハ忽
無政府ノ形况ヲ見ルニ至ル可シ共ニ極端ニ走ル者ニシテ
中道ニ非サルヤ明ナリ此弊ヲ避ケント欲スルニ由リ諸國
ノ憲法ニ此ノ如キ明文ヲ掲クニ至レルハ誠ニ止ムコトヲ得

サルニ出テタル者ナリ我憲法ノ第七十一條アル所以ソ者
モ亦此道理ニ外ナラス
以上ノ五原則ニ付テ論テ來レル者ハ「グナイスト」氏ノ歐洲
諸國ノ歲計豫算ヲ論スル爲ニ採用セル者ニ倣フ試ニ相
比較セル者ニシテ中ニハ我國ノ事情ニ適切ナラサル者モ
アル可ケレモ恐クハ無用ノ談ニ非サル可シ
此外猶近時ノ學說ヲ參考シテ結論トナサントス蓋豫算ヲ
議スルコト至難タルハ固ク之ニ複言スルコトヲ要セヌ此至
難ナルコトヲ認ムルニ由リ世ノ識者千思萬想シテ其紛議ヲ
調停セント欲シ之カ説ヲチヌ者少カラス
「グナイスト」氏ハ英國憲法ニ根據シテ歲出ヲ分テ固定及移
動ノ二種トナス可キコトヲ論シ「フシ」ド「ライチケ」氏ハ之ニ同
意ノ旨ヲ表スルコトヲ其著書ニ載セタリ此ノ如クスルハ

豫算ニ關スル紛議ヲ稍鎮靜ス可キ者ノ如シト雖モ恐クハ
又其意ヲ達スルコト能ハサル可シ「ラバント」氏ノ説ニ曰ク英
國ハ巴力門國トモ稱ス可キ一種特異ノ國體ニシテ代議院
ノ黨出テ行政長官トナルコトヲ得ルヲ以テ「二」氏ノ説モ英國
ニテハ行ハル、コトヲ得レモ此制ヲ獨逸ニ輸入シ獨逸ニ於
ケル豫算論ノ争點ヲ調和セント欲スルモ何等ノ用ヲナサ
ル可シ
經常費ト臨時費ト區別シテ經常費ハ毎年議會ノ諾否ニ由
テ動搖セシメス只臨時費ヲ議會ノ議ニ付セントスルニ付
キ二種ノ説アリ第一種ノ者ハ行政常費ノ總額ヲ法律ニテ
確定シ其支出ス可キ事實ヲ示サシカ爲之ヲ議會ニ提出ス
レモ只其承知若クハ心得マテニテ議會ハ之ニ由テ監督ノ
權利ヲ有スルモ之ヲ減スルコトヲ得ス縱ヒ其支出ノ方法ニ

於テ可否スルコアルモ總金額ハ増減スルコナシ此總金額
ノ外ニ支出ヲ要スル者アルハ議會ノ明諾ヲ要ス此ヲ臨
時費ト稱ス然ルニ政府ノ常情ハ多額ノ費用ヲ臨時費トシ
テ議會ノ承認ヲ得ント欲シ議會ノ常情ハ之ニ反シテ各種
ノ費目ヲ成ル丈ケ經常費中ヨリ支辨セシメント欲スルヲ
以テ政府ハ其必要ト認メタル事業ヲナスコラ得サル可ク
且需要ノ増加スルニ從ヒ費用増加スルハ所謂臨時費モ
亦經常費ノ一部分トナリ二者ノ區別全クナキニ至ルコ
ル可シ
第二種ノ說モ前說ト大同小異ナル者ナリ經常費目ノ永續
シテ毎年更メテ議會ノ議ヲ經タルヲ要セサル可キ者ヲ類
纂シテ基準豫算ヲ作り議會ノ承認ヲ要ス可キ一時ノ支出
ヲ臨時科目トシテ之ニ附加セントス此臨時科目ハ議會隨

意ニ之ヲ可否スルコラ得レモ基準豫算ハ議會擅ニ之ヲ低
減變更スルコラ得サル者トス蓋此法ハ我憲法第六十七條
ノ規定ニ類似セル者ナラシラバント氏曰ク此制ハ第一種
ノ區別法ニ比スレハ實ニ勝ル所アリト雖モ一國ノ經費ハ
截然之ヲ分テ永久ノ者トナシ一時ノ者トナシ得可キ簡單
ノ者ニ非ス年限ヲ定メテ支出ス可キ者アリ年限ヲ定メサ
ルモ其目的ヲ達スルニ至テ止ム可キ者アリ是等ハ經常費
目ニ列ス可カラサル者ナリ永續費ト一時費トヲ以テ區別
ヲ立ルハ其當ヲ得タル者ニ非ス且經常費目ヲ以テ議會ノ
擅ニ低減變更ス可カラサル者トスルハ未タ然ラサル者ア
リ基準豫算ト雖モ行政各部ノ費途ハ年々幾分ノ變更ナキ
ト能ハス某年度豫算ヲ各科各目同一ノ者トシ一點ノ取捨
増減ヲ加エスシテ之ヲ次年ニ襲用スルハ三尺童子モ其行

フ可カラサルコヲ知ル可シ要スルニ歲計ハ國勢ノ發達ト
國用増加トニ應ジテ間斷ナク其體面ヲ變更シ國家ノ現狀
ニ適合セシメサル可カラズ基準豫算ト雖モ亦必毎年議會
ノ議定ヲ求ム可キ者タルハ勿論ナリ按スルニ我憲法第六
十七條ニ據レハ議會ハ政府ノ同意ヲ得ルモ夫ノ基準豫算
ノ如キ者ヲモ之ヲ議スルコトヲ得ル者トス此說ト自ラ相合
セリ其目録ニ載スルニ至テハ其詳ニ於テハ
「ラバント」氏ノ說ハ上ノ二說ヲ非トスル者ナリ然レモ繼續
豫算派ノ一說タルニ外ナラス其說ニ曰ク歲計豫算ハ元一
年限ノ者タルヲ以テ議會ハ毎年自由ニ議決スルコトヲ得ル
者ノ如シト雖モ實體上ヨリ觀察スルモハ豫算ハ決シテ各
年度ノ時限内ニ止マル者ニ非ス各費目ノ中ニハ一年限ニ
其事業ノ終局ヲ告クル者或ハ之アルヘシト雖モ行政事件

及諸官制ノ如キ永久ニ涉リテ其費額ヲ算出ス可キ者甚多
ク且歲計中重要ノ部ヲ占ムル者ナリ故ニ吾人ハ唯昨年度
ノ豫算ヲ取來リテ今年度豫算ノ基準トナシ且政府ト國會
ノ合意ヲ得テ永續ノ性質ヲ有セシ歲出ハ後年ノ國會專斷
ヲ以テ取消スコトヲ得ストノ原則ヲ本據トナスヲ以テ足レ
リト信スト云々
之ヲ要スルニ豫算ノ性質タル固リ數年ノ平均ニ由テ算出
セル歲入歲出ノ概略ニ過キサルヲ以テ苛細ニ之ヲ審議ス
可キ者ニ非サル可ク又其性質ノ一定不變ノ者ニ非ス縱ヒ
經常費臨時費ノ別ヲ設クルモ猶其増減アル可キヲ以テ每
年議會ノ承認ヲ要スル者ナル可シ然レモ毎年審議ヲ要ス
ルノ故ヲ以テ其議權ヲ濫用シテ隨意ニ廢除削減ヲ行フ
ハ是其國家ヲシテ自殺セシム可キ者ニシテ立憲國體ニ望

3300

111

44393

△所共非ス國家ハ宜カ永遠ニ生存ス可キ者ナシ其生存
 費ヲ給セサル可カヲス此生存費ニハ縦ヨ年ニ由リ増減アリ
 ルモ其大數ハ得テ動ス可カラサル者アリ此即軌近繼續
 豫算論者ハ起ル所以也我輩人宜カ深ク考テ可キ所ナ
 リ
 △所共非ス國家ハ宜カ永遠ニ生存ス可キ者ナシ其生存
 費ヲ給セサル可カヲス此生存費ニハ縦ヨ年ニ由リ増減アリ
 ルモ其大數ハ得テ動ス可カラサル者アリ此即軌近繼續
 豫算論者ハ起ル所以也我輩人宜カ深ク考テ可キ所ナ
 リ
 △所共非ス國家ハ宜カ永遠ニ生存ス可キ者ナシ其生存
 費ヲ給セサル可カヲス此生存費ニハ縦ヨ年ニ由リ増減アリ
 ルモ其大數ハ得テ動ス可カラサル者アリ此即軌近繼續
 豫算論者ハ起ル所以也我輩人宜カ深ク考テ可キ所ナ
 リ
 △所共非ス國家ハ宜カ永遠ニ生存ス可キ者ナシ其生存
 費ヲ給セサル可カヲス此生存費ニハ縦ヨ年ニ由リ増減アリ
 ルモ其大數ハ得テ動ス可カラサル者アリ此即軌近繼續
 豫算論者ハ起ル所以也我輩人宜カ深ク考テ可キ所ナ
 リ
 △所共非ス國家ハ宜カ永遠ニ生存ス可キ者ナシ其生存
 費ヲ給セサル可カヲス此生存費ニハ縦ヨ年ニ由リ増減アリ
 ルモ其大數ハ得テ動ス可カラサル者アリ此即軌近繼續
 豫算論者ハ起ル所以也我輩人宜カ深ク考テ可キ所ナ
 リ



明治廿四年三月廿八日印刷
 明治廿四年三月卅一日出版

定價金貳拾五錢



著作發行者兼
 印刷者
 賣捌所
 同

東京府士族
 細川潤次郎
 東京市神田區北甲賀町
 壹番地

廣瀨安七
 東京市日本橋區兜町壹
 番地製紙分社

求林堂
 西川忠亮
 東京市築地壹丁目四番
 地

丸善商社書店
 東京市日本橋區通リ三
 丁目

終